き匂ふ藤の花も、色あせて哀れに寂しげに見え、庭前に燃るが如くに輝く躑躅も、雨に打れて挙げながら土に塗れるなり、若葉も辛くうな垂るゝは家中の悲しみを頒つに似て一層に陰欝に誘ひ導くやうである。今日も昨日につゞく大寄合で……分ては此の十三日は、家中の面々が立退き手當の相談、お金配當があるといふ風説を前の日からチラ〳〵小耳に挾んでゐる、臆病の腰拔侍も忽ち一騎當千の勇者に劣らず、無口で何事にも引込思案を得意とする意氣地なしも、能辯家と成つて滔々利害を饒舌ることのある金だから、彼の大野一派の奴等は若し後れて、不利益な決議でもされては大變である、今度の配當に漏るやうの事があつたら、最う當家の金は掴まれぬと卑賤心から、大雨の中を物ともせず早朝より出仕する、大野九郎兵衛のごときは最も早く來た、まだ誰れも登城するものゝ無いに、大欠伸をつゞけて、

『何だ家中の奴等は、横着者の晝行燈を買被つて、何の彼のと言ひ居るが、是りや何うぢや、些とばかり雨が降るとて未だ登城も仕をらぬ……狸奴！』

と己が心に比べて獨り沸々言てゐる處へ、出仕したのは玉蟲七郎右衛門、

『イヤ是れは……強うお早うおぢやる、此の大雨ではまだ誰れも出仕は致さるまいと存じたが……』

『何を言つてやる、是れしきの雨に恐れて居るやうではな……ハヽア、一方の束ねは出來申さぬぢや、見やつしやれ晝行燈殿はまだ出をらん、籠城の殉死のと忠義顔しながら、ノメ〳〵と城渡しの相談をする奴等ぢやぞよ、油斷したら途法もない割を喰されうも知れぬ、拙者はうんと褌を締めて居るがの、貴樣も油斷しては成らぬぞや……』

『心得ておぢやる……やア、噂をすれば影とやら、内藏助が出仕いたいておぢやりまする。』

と九郎兵衛と七郎右衛門は急に容儀を直し、勿體を付けて肩臂を張つてゐる、追々と雨を衝て出仕するものがある、大廣間も處狹きまでに人を以て一杯に成りました。

内藏助は是れ等のものを横目に睨んだ儘で詰所に入ると、御札座の御勘定方の岡島八十右衛門を招きまして、

『御札引替の手配は手落なく整つたのでおぢやらうのう。』

『御意におぢやりまする、大方は引替濟に相成り、殘額は僅でおぢやるて……御座元の方へ平當を遣し、最早拙者の手許からは拂ひ渡し濟となつておぢやります。』

『御苦勞でおぢやつた……今日は殘りの金銀を相談の席へ持出すに、不都合の儀はおぢやるまいのう。』

『何時にても、少しの違算はおぢやり申さぬ所存……』

と下調べの打合せは整つた。

是に於いて内藏助は評定の席へ出る、今まで何となくガヤ〳〵して居た一同はピタリと靜肅になる、大野九郎兵衛を始め一派の連中は片唾を呑んで、目を皿のやうに光らせつゝ視線は内藏助に注がれてゐる、彼れは自若として勘定方に命令を傳へますと、豫て用意のしてある事であるから、追々にお金は其の場へ運搬されて山と積まれる、九郎兵衛等は扨ては噂に違はずいよ〳〵お金配分に極つたと、苦蟲を踏潰したやうな顏に笑みを浮べ、泥坊猫が鯛の燒物でも見附たほどに、金壺眼を瞬つてゴロ〳〵咽喉を鳴らすは、是れでも五萬三千石の家老で候と肩で風切つた者かと寧ろ哀れと見える、内藏助は靜に一座を見廻しまして、

『一昨日の評定で大垣侯を始め、御舍弟大學様のお論しに依て、いよ〳〵御城を開渡すことに決したる以上は、只今こゝへ持出させた御金にて今後の處置をつけ、方方の當地を立退き離散さるゝに就ては、常に心掛のおぢやつて貯蓄のある方は格別

左もなくある者は此の場合途方に暮るゝ儀でおぢやれば、立退き申す手當が無うては差當りの難儀、御當家としても家中に見苦しき事のおぢやつては、御外聞に關する譯とも成り申さん……因て今日はそれ〳〵の分配をいたさうと存ずる。』

と言ひ放つと、例の九郎兵衞がシヤ〳〵り出て、

『それは一段の儀でおぢやる、如何にも見苦しき立退き方を家中の者が致いては、御當家が末代までの御外聞……流石は御城代の御計ひ御尤もと存ずる。』

と喜ばしげに挨拶しつゝ一座を睥睨し、直ぐに持出された金に手を觸れまじき模樣で、

『このお金殘らず家中のものへ、御配分ないたさるゝのでおぢやらうな。』

『イヤ暫くお待ちやれ……是へ持出させた金子は御札座の引替る一萬二千兩を引去つたもので、御城附金が二千五百兩、御納戸金が一萬千二百兩、御臺所の御預金が二千七百兩、外に六千兩、總〆二萬二千四百兩と相成つて居るが、之れを殘らず家中へ分配する譯には相成るまいぢや。』

『然らば如何に成さる思召しでおぢやる、御札座の引替も濟み申した上は、外に引け道のおぢやらうや……』

と金壺眼をキヨロ〳〵せさて詰り掛る、大野一派のものは不平を面に現して、乘出すやうにして聲援を致して居ります、內藏助は更に騷ぐ體もなく莞爾としながら、

『おぢやるて……第一淺野家の御菩提所または御當家に由緒ある寺々への寄進金を此の內より取除けねばならぬぢや、此度の變事について後々の香華料は是非いたいたいと存ずる。』

と言ひますと、流石の慾張も是に抵抗する言葉がない、今後主家の祭祀を斷さぬとの注意でありますから、誰一人として異議を稱へることが出來ないで、然らば先づ寄進の金をといふ事に成つて引き去りました、是れは翌十四日に地所に替て寄附した。

田畑三町五反三畝六歩
田畑五反三畝九歩
田畑四反五畝二十九歩
金五十兩

この時華嶽寺への寄附狀は、

播州赤穗郡加里屋村爲二華嶽院殿、久岳院殿、景永院殿、冷光院殿御墓料一、濱田三町五反一畝六歩年貢地也

但加里屋村之内、濱田三町二反三畝六歩、鹽屋村外濱田二反八畝、淺野内匠頭家中之者より寄二附之一畢、全斷絶無之樣、永々可レ在二相續一者也、依て如レ件。

元祿十四年辛巳四月十四日　淺野内匠家老

華嶽寺
高光寺
大蓮寺
遠林寺

大石内藏助

他二ケ寺の文も右樣の寄附狀で、高光寺の分は高光院殿、大蓮寺の分は戒珠院殿とある。

これで殘りの金は分配であらうと待ち構へて居りますと、内藏助はまたも、『今一口引去るべき金子がおぢやる。』と切り出すと、九郎兵衞等は眼を丸くして、睨み附けるのを更に構ひ附ませんで、『瑤泉院樣の御化粧料ぢや、これは御返納申すべきものでおぢやる。』と云つた、内匠頭の御豪所が輿入された時、化粧料として持參された金二千七百兩は、お備金の内に併せ、低い利息で領民に貸附られ、其利息で用途を辨ぜられたものでありますから、是も内藏助の言分に反對することが出來ず、一同は御尤であると返納

することに決しました、最うこれ以上に引き去るべき口はあるまい、今度こそはいよいよ配分の金子であらうと、小人どもはゾク〳〵して成るべく割好き配分に預らんと膝を進め身體を乘出して、内藏助の口を開くを遲しと待つ態は、大旱の雲霓を望むが如く、空腹に天麩羅の匂ひを嗅される如くに感じて居りました。

二三　御金分配の波瀾

眼前に黄金の花は爛漫と香を放つて、將に手に觸れんとして居るのに、スイスイと横合に反れて他へ持ち去れますから、轉んでもたゞは起ない一派の胸算用は、その度毎にガラリ〳〵と變つて氣の揉める、最う大丈夫今度はと心に期し、内藏助は如何なる捌き方をするであらう、遣口が割を喰ふやうでは多數の力で肉薄しても、當家と袂を分つ離散の立退き手當は一文でも多く取徳と、兩刀を佩する手前も利の爲めに忘れ果て、分厘を爭ふ下素の町人根性に駈られまして、茲一身の安危と主家の凶變を餘所に、大義の名分のといふことは當世に流行ぬ野暮な沙汰と、自分さへよくば他人は突轉ばしても構はぬ流義を振舞すは、恰も現今の紳士とか紳商とか云れ、大きな面をして、自働車に乘つたり馬車を馳せてゐる沒常識の奴等と變りません。

内藏助は漸く口を開かんとする態度が見えますと、扨てこそ茲損得の岐るゝところと眼を皿のやうにし、耳を兎の樣に振立てゝ、籠城の殉死のと聽いては聾か啞のやうに空耳をきらすか、コソ〳〵と逃げ出す者が、泰山崩るゝとも何のそのゝ勢ひ、勇氣の充滿してゐるは今更に哀れも深い、是れ等を見るにつけても歎かはるゝは士氣の墮弱であると暗涙を呑みつゝ、

『猶ほ一ケ條の御相談がおぢやる。』

と屹度一座を見渡しました時、大野九郎兵衛等は互に顏を見合して、又してもかと言

ぬばかりに落膽失望の體でございましたが、大野派の旗頭として九郎兵衛の片腕と頼まれてゐる、物頭役の筆頭伊藤五左衛門は堪らなくなつて、

『大夫殿、一寸と御中言でおぢやりますが、左様に一ケ條づゝポツリ〳〵と仰せられで、これ〳〵と一纏めに成されては如何でおぢやる。』

と不平の塊が込み上げて突掛つて來ますを、牛の角に蚊の止つたほどにも感じませんで、

『御相談は一ケ條づゝ段々に極てまゐらねば、纏りが容易に附くものでおぢやらぬぢや』

と輕く受け流しておき、

『さて、我等は御同様に如何にしてか大學様の御乘出しを公儀に歎願いたさねば成らん……淺野家の再興は今後に盡すべき臣子の道でおぢやる、淺野家再興に就ては用意の金が無ふては、如何に方々が忠義を盡さんとされても、手も足も出るものでおぢやらぬ、然れば此の用意として若干の金は是非取除け置かねば相成るまいぢや、方々の御意見は如何でおぢやる。』

と言出した、九郎兵衛等は又しても要らざる忠義立て、斯う何の彼のと横合にお金を攫ひ行く算段のみされては堪らん、彼奴何事にも茫然として殊に金錢のことなどは、少しも顧ぬ顏はして居るが油斷がならぬ、此の按排では何う云ふ手段を設けて引込み掛るも知れぬと、中ツ腹になつて凄い眼でグツト内藏助を睨みましたが、主家再興の準備金といふのである、九郎兵衛等がいくら强突張であつたからとて、彼れも淺野家の祿を食んでゐる家老である以上は、之れを表向に拒むことは流石に出來ません、不性不性に澁面つくりながら、

『お家再興の御用意金としては、何程取り除けらるゝ御所存でおぢやる。』

『左様、そこが御相談でおぢやる。』

『御用意金のことでおぢやれば、拙者は三千兩もあれば十分でおぢやらうと存ずるが、各は何と思はるゝぞ。』

と九郎兵衛が金高を切出して、成るべく配分の高を多くしやうとする賤劣な心が見え透いて居ります、内藏助は嚴然として、

『大野氏は算盤取つては天晴名譽の方でおぢやるが……三千兩や四千兩の御用金で何程の事が出來居らうと思さるゝぞ、一萬兩でも決して潤澤な御用金とは存じ申さぬ、で、先づ一萬兩を缺くことは相成るまいぢやて……』

『一萬兩！』

と彼れは例の金壺眼をギヨロ〳〵光らせて呆れる、彼れ等一派のものも流石にお家再興といふ事が頭腦にピンと響き、強て爭はんとする勇氣もない處へ、九郎兵衛には一大禁物の原惣右衛門が

『お家再興の御用意金に彼れ是れと申すべき場合でおぢやらぬ、家中の者は立退きに見苦しくないまでのお手當を頂戴すれば十分ぢや、縱んばお手當が無いとて何かあらん、有福なものが救ひあつて、主家の面目を傷けざるが最後の御奉公でおぢやらぬか、御異存のある方々には我れ等お對手仕らう……』

と一喝しましたに、九郎兵衛も聲を潜めて、お家再興準備金は一萬兩と極りました。

扨て今度がいよ〳〵家中へお金配分の大評定である、張扇をピタ〳〵敲き散して聽衆を嬉ばせる講談などの山である、内藏助は現今の言葉で云へば平民主義の人であつた、平等を主張する精神を有してゐた、夫れでありますからお金配分に就ても自他平等を以て割り當る考へであつた、

『さて、方々へ分配すべきお手當でおぢやるが、高祿をたまはり居らるゝ人は自から

餘裕もおぢやるべきで、假定家產を賣拂はるゝとも相應の用意に差支へはおぢやるまいが、小祿を受け居られた方は常に手元が十分で無い人も多いやうに承つて居る、勝手不如意のところへ此度の變事、急に立退と成つては隨分御推察を至されるぢや、然れば今日の配分も祿高の高下を問ず、御家中一同へ平等に割り當たならば、手元不如意の方々も氣安く退散も出來、御當家の面目も世間體よろしからんと存ずるが、如何でおぢやらうぞ。』

と家中の手元を汲みて、小身者の困難を察した同情に富む方針に一同感じ入りましたが、九郎兵衞の眼は忽ち異樣に光り放つて、是れは大變な次第、若しこの議に決した時は僅の取り分より無い、小身者と一所に取扱はれて頭割りに甘んずるなら、今朝の大雨を冒して一番がけの出仕はいたさん、是りやア一番蹈張つて高割りの配分にさせねば堪らぬと、鐵火箸のやうな腕を捲り揚げ、席を乘り出した勢ひは天晴の老骨と見えたが、

『大石殿の御意見は拙者第一の不同意でおぢやる……能くものを積つて見られい、高祿には高祿だけの分限がおぢやるぢや、又小身者には小身だけの分限よりおぢやらぬ、假定て申さんに小身の手合ならば、二兩の金にて事足る場合でもな、我れ等の分限となつては十兩も二十兩も要る事がおぢやるぢやて、城代の御手前はまた我れ等よりの一倍の御物入のあるは御承知でおぢやらう、それに分限をも考へず、家中の一同へ平等に割當やうとは、甚だその意を得ざるお取扱ひでおぢやらぬか、大野九郎兵衞第一に不同意でおぢやる。』

と疊を叩いて反對の態度に出ると、彼れの片腕たる伊藤五左衞門はその尻馬に鞭を當てゝ進み出で、

『大野氏の御意見至極御尤でおぢやる、某とても不同意……』

と小荷駄馬の暴れる如く一跳ねはねるや、是れに氣乘りのした外村源左衛門、王蟲七郎右衛門、近藤源八、岡林杢之助なんどの高祿を貪りゐる面々が、不同意々々を連呼しつゝ親分に聲援する、けれども彼れ等一味とて小身の者は頭割りが有難いから、大野一派の慾張説に反對して居ますが、悲しいかな、身分の輕い者は何を言ひ出しても取り揚げられぬ、階級制度の甚だしい時代でありますので、涙を呑んで口を噤んで居ます、又正義の士にあつては九郎兵衛の説を駁擊する時は、我が田へ水を引くものと見做れるが辛い、況て事が金錢に掛る問題でありますから、當時の侍氣質として金を賤むこと一通りでないので、殊更に口を挾むを避けて一言もいふものが無い。九郎兵衛等は茲が大事の場合とます〳〵肉薄して來る、その言ふ處に滿更理窟の無いでもないから、寛仁大度の内藏助は、

『然らば祿高割に配分いたさう。』

と承引する、勘定方はバチ〳〵算盤をはぢき、百石につき金二十四兩の配分といふことに極つて、勘定方の岡島八十右衛門は先づ内藏助の分を取り、

『御改めの上お受取下されい。』

と差出すを、内藏助は手にだも觸れず推返し、

『拙者は之れを、戴かずとも差して困りは致さぬ、この分は諸士の方へお組込み下されい。』

と受取らない、其の淡々として美しいこと斯くの如しである。

二三　暗に響く破鐘聲

大野九郎兵衛は祿高六百五十石でございますから、百五十四兩の配分金を受取りて、是れさへ貰へば最う用はない、跡は野となれ山となれでスツと席を立つて廊下へ出た。

彼れは初め御札座に於いて引替をするのにも、不贊成を鳴らして居つたのである、領民は如何に困しまうが損をしやうが構はぬ、自分さへ甘いとをすれば滿足するのである、殊に淺野家菩提所の寄附やお家再興の用意金の取除には面白くない、就中お家再興の金として一万兩を天引にされたを、根に苦に殘念で奇怪至極に感じて堪りません、處で御札引替の衝に當つた者は誰であるかと云へば、勘定方である岡島八十右衛門だ、夫れに今度のお金配分方に就ても内藏助の信用を受け、專ら斡旋盡力して居るのは八十右衛門であるから、九郎兵衛はその顏を見るのも小癪に障つて堪らない上、この頃御札座の役人中で、引替の爲めに八十右衛門が受取つた現金の一分を搔攫つて逐電した奴があつたを、何を云ふにも上下混雜を極めて居る時といひ、八十右衛門も同僚の者に泥坊が居やうと思ひませんから、警戒を怠つて之れを未發に防ぐことが出來なかつた、九郎兵衛は彼れ自身の心に比べて八十右衛門に疑ひかけ、青い眼鏡で睨んでゐる矢前に、今日のお金配分にも内藏助の命を受けて、八十右衛門が衝に當つて切て廻してゐるので、彼れはいよ〳〵内藏助と心を協せて宜いことをして居らうと僻み、廊下へ出ると憚かる處もなく、

『ヘン何だ、札座役人が御用金を引攫つて逃げたと……小役人ばかりぢやおぢやるまい、其處等あたりにも頭の黑い鼠が居る、なアに何奴も此奴も一つ穴の狐に極つて居るわ。』

と無遠慮に放言しつゝサツサと歸つて了ひました、壁に耳あり德利に口ありとか申して、蔭で密々に喋舌つたことでも何時となく世間にパットする事があるに、衆人稠座の中でないまでが、廊下でそんな惡たれ口を叩いては直ぐ廣まらぬ筈はございません、是れを聞いた有志は憤慨して八十右衛門にも告げると、素より正直眞法の男で後暗いことは微塵もないから、忽ち烈火のごとくに怒り、怒髮天を衝くとは此樣のを云ふの

であらうか、小鬢の毛がブル〳〵と震へて逆立ち、齒をキリ〳〵と咬みつゝ、

『籠城といへば腰を拔かしコソ〳〵逃げながら、お金配分といへば眞先にジャ〳〵振り出して所得を爭ふ、祿盜人の人非人の分際で、人の賊名を負さんとするは奇怪千萬なり、聞き棄てには罷り成らぬ、彼れが首を刎ねて不忠不義の徒の心膽を寒からしめて呉れう。』

と敦圉き猛りましたを、聞いてゐた腰拔一派の臆病者は身慄ひして怖れ、密かに九郎兵衛に知らせたものがあつて、彼れは吃驚して縮み上り、あゝ口は禍門の元だと覺つたも後の祭りで、今更何とも仕方なく、亂暴者が來たら留守のこと〳〵と小く成つて居りました。

岡島八十右衛門はプツ〳〵怒つて、直ぐにも大野の邸へ押掛けて往きたいのであるが、今日のお金配分には職務を盡さねばならぬ、若し間違ひがあつては自分の落度ばかりではない、主腦者たる城代大石内藏助の瑕瑾となる事でありますから、殘りなく配分の了るまで油斷なく忠實に勤めて、全く渡し濟になりましたのは火點し頃で、廊下の此處彼處には鐵網の行燈が薄ぼんやりと光を放ち、雨は幸ひに歇んでゐるが雲は猶ほ霽ず、今にも降り出さんとして居ります、八十右衛門さア是れで我が身體になつた、いざ不埒千萬許しがたき大郎九郎兵衛の邸に押掛け、不忠不義の首を提げて來ると餘憤未だ去らずして、朱鞘の大小を落し挿しにドン〳〵と大野の邸にやつて參りました、玄關には茫然と火影が見えて居るが、まだ門を締てございませんから、之れ幸ひと玄關の前に仁王立になつて怒りに任せた破れ鐘聲へ、

『頼まう！』

と叫びますると取次の者が倉皇て出で來りましたが、八十右衛門の尋常ならぬ權幕に先づ恐れを抱き、ビク〳〵もので、

『何方様でおぢやりまする……』

『拙者は岡島八十右衛門でおぢやる、少々御主人に申し入れ度儀がおぢやつて推參ないたいた、是非に御意得申したい……』

と言ひ込む、取次は直ぐ奥へハタ〳〵と足音荒く駈けこみ、九郎兵衛の居間の次に手を突き、キヨト〳〵して目を白黒させてゐるに、九郎兵衛は横目にヂロリ、

『何ぢや、慌だしい……』

『ハイ、只今岡島様が……』

『ナニ、岡島が參つたとな……七里缺敗、留守だ……留守だ、留守だと申せ……』

と取次の者を追ひ遣つたが、九郎兵衛氣になつて堪りませんから、窃と後より尾て行き、玄關の此方に身を潜め擧動を窺ひゐると、

『主人は只今留守でおぢやりまするが、御申し置きの儀におぢやりますれば承はり度うおぢやります。』

『フン、留守……留守とあらば是非がない後刻再び參るであらう。』

と素順に立去つたので、九郎兵衛はヤレ嬉しやと胸撫下し、生命拾ひをした氣はするが、後刻再び參ると云つた言葉が耳に殘る、さア大變である、彼樣奴に逢た日には堪つたものでない、直ぐに打た斬られるは知れてゐるのだ、今日も大骨折で百五十五兩を得たのも何の爲め、長命をして浮世を面白く暮さうの望み、刀の錆にされたら二つとない此の命が失なるのだと、首を縮め何とか一工夫せねば成るまいと考へて居る處へ、悴の郡右衛門が歸宅し、

『父上、隱かならぬ取沙汰を聞いて、急ぎ立歸つておぢやりまする。』

『郡右衛、何ぢや……穩かならぬ取沙汰とは、ウム、何事ぢや。』

『岡島の八十右衛がな、邸へ乘込んで參つて父上の首を提げてまゐるとやら……』

『それは一大事ぢや、現に只今來居つたを留守で追ツ拂つた處でおぢやる。』
『さては危い儀で……』
『斯う睨まれては逃れるに道がない、幸ひ此間より主な荷物をポツ〳〵出入の町人共に預け置たで、手廻りの始末ないたいて引拂ふが上分別でおぢやらうぞ、何うで一度は遲いか速いか立退くに極つた處ぢや、最うお金配分に預かる上は、この後出すことはあつても、德分の附く見込みは些とも無い、そんな處に何時までヘバリ附て居るに及ばん、何とさうぢやあるまいか……』
成る程、御名案でおぢやる、最早用のおぢやらぬ土地、一刻も早く立退き、身の有附を定めるが當世でおぢやらう。』
『その事〳〵、善は急げぢや、用意さつしやい。』
『畏つておぢやります。』

と大野父子は早や立退きの計畫を立てた、九郎兵衛は手廻りの荷物纒め出しましたが、既に十幾梱といふものは、手廻しよく町家へ預けてある、配分金を握つたら尻に帆を掛ける算段は附けておました。
『頼まう！』
といふ大聲は再び玄關に聞える、ヤレ大變また來居つたと九郎兵衛は先廻りして、取次の出ぬ間に飛んで往き、言ひ含めましたから、今度は手際よく、
『是れは度々恐れ入つておぢやりまする、主人儀いまだ歸宅いたしませんで……』
と取次が白を切るを、正直一遍の八十右衛門でありますから、
『留守！左樣か……』
とスツと歸つて了つたに、九郎兵衛は存外與し易しと、少し侮りの心を生じ、
『これ〳〵、彼の馬鹿者がまだ度々參らうも知れぬがな、只今の調子で留子の一點張

りを押切つて了へ……』

と云付て居間に還つて、金目な物具や大切な書附類を纏める、金は胴巻に容れるやら器物の間へ氣の注ぬやう隠すやら、苦心惨憺を極めて居りまする。

二四　大野父子の逃亡

度々頼まう〳〵に脅かされて、門は閉めましたが流石に締りを宵の口からして了ふ譯にも往かず、潜門だけは締りをして無い、岡島八十右衛門は締りのない潜門を開けてヅカ〳〵と玄關前に立ちはだかりました、またも

『頼まう〳〵』

と大聲に叫びましたは三度目、ソレまた岡島様がと取次の者は、心得て丁寧に玄關の式臺に飛び下り、

『是れは〳〵度々のお尋ねで……、いまだに主人は歸宅仕りませぬ。』

と追拂ふとしましたが、今度は左様かと立ち去らぬ。

『ナニ未だお歸りやらぬとな、馬鹿を言つしやい、大野氏は御在宅ぢや、八十右衛門が是非御意得申さう、ぐづ〳〵せずと取次さつしやい、取次が出來ぬとならば、案内は頼み申さぬ、直き〳〵奥へ罷り通りて御意得申すまでぢや……』

と怒氣を帶びて大喝する聲は、奥へも手に取るやうに聞える、甘く見くびつた取次も此の權幕に膽を冷しました、

『先づ〳〵お控へ下されい。』

と眞蒼になつて奥へ轉がるやうに逃げ込み、アタフタと九郎兵衛の居間へ走り寄り、

『旦那様、此度は中々なこと、岡島様は強い御立腹でな、お度次を申さねば直き〳〵お居間へお通りなさると、豪いお勢ひでどおぢやりまする。』

『ナニ自分で押掛け參るとな、何故留守で立切らぬのぢや、此の白痴者奴が……』

『御意でおぢやりまするが、大野氏は御在宅ぢやと仰せられ、旦那樣のお在のことを御承知の上と存じられまする。』

『在宅ぢやと申し居るか、夫れは一大事でおぢやる、彼の亂暴者に遭ふては大變……ハテ困つたな。』

と九郎兵衛は絶體絶命の場合になつて、最早生きたる心地もせず臆病風は身柱元からゾク〳〵吹きこみ、胸は跳りあがつて動悸がドキ〳〵と打つて來る、是に至つて百計盡きた苦し紛れ、急病だ〳〵、急病だと云つて斷れとブル〳〵身を震はせて口唇の色も變つてゐますに、悴の郡右衛門、

『手硬い對手、中々取次位の挨拶では歸り申すまい、某ならば眞逆に無法も致すまいぢや、萬一亂暴を働き申すやうな素振の見えた時は、直ぐ逃げ込み、共々裏門より逃申さん、其の御覺悟にて……』

『心得た、成るべく穩便に追拂ふ手段をな、宜いかな……』

と九郎兵衛は心配さうに云ふ、郡右衛門は親の絶體絶命の場合、知らぬ顏もして居られませんから、恐る〳〵玄關に立ち現れ、

『是れは〳〵、岡島氏でおぢやるか、度々の御來駕に父の不在で失禮を申し上げておぢやる、實は只今歸宅はいたいておぢやるが、途中よりの急病を發し、何分今宵は御意得ること適ひ申さぬ、明朝にても病少し快くば病床にても御意得申すでおぢやらう、平に今夜のところだけは御宥免を戴きたうおぢやる。』

と平身低頭して只管に賴む、その狀泣くが如く訴ふるごとくである、八十右衛門も之れを信じはしないが、彼れ一人を成敗するに、必ず今宵に限る譯でもないと、

『オイ郡右衛、貴樣の親父は拙者が大夫殿と心を協せ、金銀を取つたと衆人の前で憚

る處なく申したさうでおぢやるが、拙者は左様な男でないわ、何を證據に申した、貴様とて親子のことである、夫れ知らぬ儀はおぢやるまい、言つしやれ……』

と敦圉あらく突掛つて來るに、郡右衛門は驚き狼狽まして、

『岡島氏、先づ〳〵お待ち下されい、某に於いては毛頭左様の儀は存じ申さぬこと、それは何卒親父に御懸合下されい……』

と只管に詫り入つて、若し刀の柄に手でも掛たらば直ぐ逃げん支度をしてゐる、八十右衛門も此様奴を斬つて捨たとて斬榮がせぬと思ひましたか、

『然らば明日の朝まで待ち申さん、屹度面會さるゝでおぢやらうな、若し否やを仰せらるゝ時は、容赦せず奥へ推參をいたす、確と御約束申しておぢやりまするぞ。』

と語氣鋭く言捨て、フイと歸つて了つたに、郡右衛門はホツト息を吐き、奥へ倉皇しく駈け込みました。

『父上、最早猶豫は成り申さぬ、今宵の處は言葉を設けて追拂つておぢやるが、明朝押掛てまゐつたら百年目、中々容赦は致すまい……蛇に見込れた蛙で動きが取れ申さぬぢや。』

『イヤ何うも困つた奴に附纏れたものぢやのう、仕方がおぢやらぬ、今夜のうちに立退き、彼奴に鼻明して呉れう、うか〳〵致して居つて狼藉に逢ひ怪我でもしては、此の上の痛事ぢや、密かにいたせ……』

と九郎兵衛は恐怖の念に驅られ、今にも襲撃されんかとビク〳〵もので、女乘物に乘つてこつそり裏門より脱け出でました。

郡右衛門も十三日の月は雨雲に閉されて、往來の闇を忍ぶに便りよしと、女房を急き立てつゝ狼狽まはつて我が家を脱け出で姿を隱しましたが、餘りに取り急ぎ召使ひの者に覺られて、若し騷がれては一大事とや思ひけん、只だ密かに〳〵と夫婦は乳呑

兒の乳母に抱かれて睡るを起し、泣き出されでもしは家内の者に知れる恐れあり、親は無くとも子は育つの諺もあれば、行方定めぬ旅から旅へ渡るに小兒があつては却つて足手纏ひになること、知らずに居るこそ結句幸ひなれ、其の儘に〳〵と郡右衛門は手を振り、流石に女房は女の事とて我が子の愛に後髪引かるゝ手を、無理に引き立て行方を暗に晦したは、此の親にして此の子ありで、殘忍酷薄な性情は此の一事でも能く現れて居ります、素より偶然ではあるが、九郎兵衛は初めの大評定に原惣右衛門に荒膽を挫がれ、今又岡島八十右衛門に迫られて夜逃をするに至つたことで、八十右衛門は實に惣右衛門の弟であるから、奇妙な感じがするぢやありませんか。

大野親子が赤穂を逐電しましたは四月十三日、お金配分のあつた當夜岡島八十右衛門に脅迫され、命辛々逃げ出した時には最うチヤンと逃支度が爲てある、九郎兵衛の財寶は城下大津屋十右衛門に預けてあつた、介石記などで見ますと其の荷物が七十餘箇あつたと云ひ、郡右衛門方は是れも城下の材木屋庄兵衛の處へ預け、荷物の數が九十餘箇あつたを、親子が逃亡の後、その行跡を懲す爲に封印を附られました、處が其の年の八月廿六日九郎兵衛は最う餘焔の冷たころ、家中の者もそれ〴〵離散した跡であるから、誰も彼れ是れと小喧しく言ふものはあるまいと、鐵面皮にもノコ〳〵赤穂へ遣つて來て、

『十右衛、久方振ぢやつた、永々荷物を世話になつたが、今日は請取に來た、渡してくりやれ。』

『是れはお珍らしい、お氣の毒でおぢやりますが、お荷物は大石様から封印が附き、町内一同へのお預の品、大石様のお許が無くてはお渡し申されませぬ……』

『拙者の物を拙者が持往くに何の仔細は無いこと、内藏助の指圖が要らうや……』

と威張て見ましたが大津屋十右衛門、中々頑固に構へて承知しませんので、九郎兵衛

一策を案じ、夫れでは今宵一夜泊てくれと頼むを、大津屋も舊の出入屋敷の旦那である、斷りかねて一泊さすると、九郎兵衛はその夜半、密かに土藏へ忍込封印の付た我が荷物の中に隱して置いた三百兩を掴み出し、ソッと表へ逃出すを主人に見附られ、大津屋では合圖の鐘を鳴すと、町内よりバラ〳〵と大勢の者が飛出し、

『金を返せ……泥坊！』

と追駈けて忽ち大勢に取卷れたに、九郎兵衛も最う斯うなつては是非がありませんから、三百兩を投出しましたが、町内の人々は中々許さず、さア來いと無理に引立て歸つて、翌朝になると町内のものが大勢ワイ〳〵囃し立て、赤穂の町中を引廻して城下外れへ來ると、最う用はないと阿房拂ひを喰ひ、耻の上塗をしました。

二五　城代邸内の激論

大野九郎兵衛親子の夜逃は、十四日の朝に成つて知れた、如何に貪慾であつても如何に腰拔であつても九郎兵衛は、仕置家老でありますから城引渡しの濟むまで、其の職に當らねばならぬ無いのに、夜逃をしたと云つて公邊の勤めを疎かには出來ない、依て内藏助は物頭中の大身で、籠城にも殉死にも將た密約にも連盟の奥野將監を擧げ、萬事の相談對手といたしました。

この夜江戸よりまた〳〵堀部安兵衛、奥田孫太夫、高田郡兵衛の三人が遣つて來た、安兵衛と孫太夫は劍道に於いて天下に豪傑と聞えを取つた堀内源太左衛門正春の門下で、英名を四方に轟かした隱れなき達人である。郡兵衛もまた常に過激な議論を唱へて、義を好み俠を衒ひ人後に落るを嫌ふ性質がありますので、後には變節したるものの當時は三人の意氣投合し、此の度の凶變が起ると平生の意氣からしても默つて居られない、老てます〳〵壯んなる老英雄堀部彌兵衛を推して首領に仰ぎ、江戸定府の同

志と語つて吉良上野介を討取り、亡君の遺志を繼ぎ修羅の妄執を拂はんと寄り〳〵に計略を回らしましたが、臆病未練の恥知らず江戸家老藤井又左衛門、安井彦右衛門の佞辯に惑されて相談が捗々しく進まない上、氣骨あるものは追々赤穂を指して出發し、殘つたは彌兵衛、安兵衛、孫太夫、その養子貞右衛門、郡兵衛等に過ぎないが、目指す敵は上杉家の後援があつて、中々五人七人で斬込んだとて上野介を討取ることは難い、蟷螂の斧を振て龍車に向ふに均しい、是れでは望みを果さず世間の笑ひ草になる、寧そ赤穂に馳せ上つて籠城せんと、晝夜兼行で十四日の夜赤穂に着いて聞けば、是れは案外至極、此處も臆病風が吹き荒んで開城に決着してゐる、殊に昨日はお金配分までがあつたと云ふに、三人は忽ち烈火の如く怒り、咄、城代何者ぞ、をめ〳〵城を渡して退散せんとするか、内藏助は左程の臆病未練はあるまいと思ふたにと、腕を扼し齒をくひしばつて憤慨しましたが、最う仕方がない、此上は内藏助の邸へ押掛け、彼れの首根ッ子を抑へて道理を說き、それにて志を翻さぬ上は是非に及ばぬ、我れ我れ三人潔よく殉死を遂げて臆病者の心膽を寒からしめて呉れうと、勇氣勃々大石の邸を訪ふて來意を告げた。

内藏助は喜んで三人を迎へる、此方は手ぐすね引いて待つて居たところ、二三の會釋が了ると堀部安兵衛膝行出で、

『大夫殿、何故籠城をお止め召されておぢやる、御代々の在した當城をムザと明渡し召さるとは、近頃以て大夫殿の成され方とも存じ申されず、何卒思召しを翻へされて、再び籠城とお定め下さるまいか、如何に士道の衰へた今日とは申せ、大義を唱へて立つに何の躊躇いたすことのおぢやらう、返す〳〵も御再慮を煩はしたい。』

と意氣凛然として勸告をする、孫太夫も郡兵衛も膝に置く手に力の籠つたのが見えて勇しい、内藏助もその勇氣といひ、決心と云ひ天晴の人物、共に事を爲すべき者と喜

ばしく思ひましたが、喜怒哀樂を色に現さざる器量人である、徐ろに答へて、

『方々の御忠告は拙者も直ぐさま御同意申したうおぢやる、御志しのほど感じ入つておぢやるが、茲に一つの難義と申すは、先頃江戸へ遣しし多川、月岡の兩人、拙者が注意を用ゐずして使命を誤り、大學様に籠城の儀を御聽に入れ申したぢや、それでな大學様よりは懇々と開城いたすべき御沙汰を蒙り、又大垣侯よりも入懇の御書面幾通となく賜る、態々御家老を遣はさるゝなど甚だ迷惑に存じ居る……殊に大學様より下されし御沙汰を顧みず我が儘勝手に籠城いたすに於いては、大學様の指圖に依て籠城いたすやうに公儀に聞え、忽ち御身にお尤を被りたまふは必定でおぢやる、左様の儀と相成つては、故殿様の思召しにも背き、御連枝にも御迷惑を相懸け申す儀でおぢやるて……殘念ながら涙を呑み、節を折て開城と決した譯でおぢやる。』

と餘儀なき次第を語り出でたが、三人は中々にさる事で屈服はしません。

『御申し聞けのところ一通りは御尤でもおぢやらうが、全體喧嘩兩成敗といふことは權現様以來の掟でおぢやる、殿様の御腹を召されたは御落度の在したからと諦めるに致いても、對手方たる吉良上野介殿は何うでおぢやる、夫れ相應の御尤もあらば格別、その儘にケロ〳〵として罷りあるは、片落の御捌きと申さねば成らぬぢや、對手方を彼のやうに爲しおき、指を啣へてムザと當城を明渡すことが成り申さんや、斯くては我れ等が地下の故殿様に何の言葉があつて御目通りが出來申さうぞ、法を行ふものが法に背きて片落の行ひいたす以上は、武士の面目を相立てざれば適はぬ、大學様には御氣の毒でおぢやれど、素より然る思召しの在さぬことは天照皇太神宮も御照覽遊すところ、斯かる瑣事に御拘りなく籠城の儀を御實行成され、國家に殉ずるの大義名分を何故明かには成さらぬぞ。』

と意氣鋭く肉薄し來る勢ひは、雨後の大瀑布のやうで滔々として何物も遮り止めることが難い、内藏助は冷かに、

『イヤ段々の御所存如何にもお勇ましく存ずる、方々は何うあつても開城は御意に適はず、是が非でも籠城成さらうの思召しでおぢやるか……』

といふと、安兵衛は躍起となつて、

『這は大夫殿のお言葉とも存じ申さぬ、この場合になつて籠城より外我れ等の執る道はおぢやるまいに……』

と臆する體なく言ひ放ちます、孫太夫は腕を扼し、齒をキリ〳〵と咬みつゝ、

『我れ等は一死以て君恩に報ずる外に、何の考へもおぢやらぬ、開城なんぞとは以ての外の儀でおぢやる、矢盡き刀折れて初めて死につけば、故殿様に申譯立ち、天地に恥ぢざる武士の本分でおぢやらう。』

と叫ぶ尾につく郡兵衛も

『我れ等遙々百五十餘里の道を當地へ來たるは何の爲めでおぢやる、今日の場合是非を論ずるに及び申さん……』

と口角泡を飛して迫ると、内藏助は

『御意見は然ることながら、開城のことは既にお受けに及び大垣侯まで申し上げておぢやれば、最早如何ともいたし難い儀でおぢやる。』

と判然申しますると、三人はます〳〵激昂いたして、

『赤穗の士は死を畏れて開城した、赤穗に一人の士なきかと、天下に嘲り笑はるるも御構ひおぢやらぬか……』

と鋭く切込み來るを内藏助は、靜に容儀を整へつゝ、

『假令、天下に笑はるゝとも、一旦許したる約束は反古になり申さん。』

と言ひ放ちましたので、三人は怫然として席を蹴立てゝ去り、揃ふて磯貝十郎左衛門の宿へまゐる。

翌朝は奥野將監を襲ふて籠城説を繰返しましたが應じてくれぬ、正義の士幾人にか相談もしたが捗々しくない、其の中彼の密約卽ち復讐の連判に預らなかつた、片岡源五右衛門、磯貝十郎左衛門、新來の堀部安兵衛、奥田孫太夫、高田郡兵衛の五人は何うせ死するなら亡君のお恨を散じて死なう、江戸には年は取りたれども堀部彌兵衛あり、奥田貞右衛門あり、君の仇上野介を討て御墓前に腹搔き切らん、吉良の邸へ斬て入るは難いが、途中に於いて要擊するには七人同盟すれば、事の成らざるとも有るまじと相談するを、チラリと小耳に挾んだは原惣右衛門でございます、主君の鬱憤を思ふは素より同じこと、五人組をこの儘にして置き、若し逸つて仕損じられては一大事であると、窃かに内藏助に面會いたして其の模樣を話ますれば、宜しい、素より忠義の人々同志に加へ共に事を擧げんと、内藏助はその夜五人を我が邸に招きました。

凶變以來赤穗へ來てゐる片岡源五右衛門、磯貝十郎左衛門、また新に來た堀部安兵衛、奥田孫太夫、高田郡兵衛は大石の邸に招かれて參りますと、原惣右衛門も來てゐる、江戸詰の者ばかりであつた、内藏助は至極の機嫌にて、

『方々を態々お招き申したは餘の儀でおぢやらぬ、我れ等が籠城を思ひ止つたことに就て密々御意得たい儀がおぢやつて……』

と云つて一座を見廻しますと、今更改まつて何を言ひ出すであらうかと、視線は皆内藏助の上に放射して居ます。

『此度の凶變に就て方々の御憤慨は御尤でおぢやる、斯く申す拙者とて方々に劣らぬ所存でおぢやるが、身を捨て國に報いるは只だ今日にのみ限つた事でおぢやるまい一旦玆を退くとも、また後に圖るべき道はおぢやるものぢや。』

と語氣は甚だ曖昧であるが、意味を味へば深いところに言ひ現されぬ趣きが見えますので、昨日激論をした三人も首を傾け、堀部安兵衛のごときは微笑みました、このとき原惣右衛門も口を挾み、

『方々の御催しは然ることとながら、大夫殿にも思召しもおぢやること……主君に忠義を全うせんと存ずるは誰れも同じことでおぢやるて……』

と謎のごとく言へば、眞意は以心傳心、人々の胸に響きも強く、

『大夫殿にその思召しのおぢやるからは、我れ〳〵が危き業をいたいて仕損ぜんよりも、同志力を戮せて共に望みを遂げ申すは本懷でおぢやる。』

と挨拶して、玆に肝膽相照して、内藏助の意見に任せて時節の來るを待つことになり、一同胸襟を開きて猶ほ後事を談じ合ひ、俄に雲霧の霽たる心地して勇みにいさみて互に袂を分ちました。

二六　奇怪なる曲者よ

開城は最う數日の後に迫つた、城受取の役人は追々乘り込で來る、域内の警備は日を追て段々嚴重になる、籠城はお止めになつたとの取沙汰は專らであるが、城中は何となく混雜を極めて、此處の修繕彼處の手入に忙がしいので、雨とやならん風とやならんと人の心は落付きません、此の時に當つて内藏助はます〳〵城内の警戒を弛めず、大手搦手は素より要所〳〵へ人數を出して、弓に弦かけ鐵砲に火繩を配り、をさをさ籠城も爲べき光景でございますから、近傍の大小名は内藏助の胸中を圖りかねて、いざと云へは打て掛らん用意に心を配つて居りまする。

警戒は斯くの如く嚴重であるので、足輕頭の吉田忠左衛門は今日も部下の數十人を引連れ、城中を見巡つて居りましたが、彼處の隅では壁の落ちたを修繕する一團があ

るかと思へば、此處の廣場では草を刈り枯枝を下し掃除をすれば、多くの人夫日傭のもの立ち働いて居ります、忠左衞門は一々是れ等の擧動に注意を拂つて、大手の櫓下へ掛りますると、此處に一隊の人夫が働いてゐる、立止つて働く擧動を視てゐると、何れもソレ役人の見巡りであると目引き袖引きして、油斷なく活動して居ります中に、ある一人の人足に不圖眼を注ぎ、只管その者の擧動に心を配つてヂツト窺つてゐる、人足の方では更に何事も心付ぬ狀にて忠實動いて居るを、忠左衞門は見定める處がございましたか、突然

『彼奴、甚だ怪しい、召捕れ！』

と嚴命を下したので、部下の足輕は四五人バラ〳〵と群りかゝつて取つて押へんとしまするを、彼の人足は忽ち兩手を擧げ、

『暫くお待ち下され……決して手向ひはいたし申さん……』

と犇々と搦め捕らんとする足輕を制し、少しも惡びれたる樣子なく、ツカ〳〵と忠左衞門の前に進み寄らんとするより、足輕共は支へんとするを、忠左衞門は

『苦しうない、何程の事も爲し得申さうぞ……』

と自若と控へるに、人足體の者はいよ〳〵感じ入つた體にて、大地に平伏し、

『誰方かは存じ申さぬが、御眼力の程恐れ入つておぢやる。』

『ハヽア、矢張な……』

と忠左衞門の微笑むを見仰げ、

『御鑑識通り、某は御隣國より紛れ込んだる間者でおぢやりまする、御城中の防備または御人數の多寡をも取り調べんと存じ、人足に交り忍びておぢやりましたが、斯う見現さるゝ以上は、某の運命も最早是れまでよおぢやれば、何も隱し立てしておく手數を煩はすことは致し申さん、此の上は武士の情でおぢやる、繩目の恥辱だけは

御許し下され、この場に於いて切腹な仕りたうおぢやるが……』

と立派に言ひ了つて、許すの一言を待つものの如くである。其の態度と云ひ決心と云ひ、天晴見上げた振舞に、忠左衛門は莞爾として言葉を和げ、

『いや決して其の儀には及び申すまい、士は相身互でおぢやる、其の許が主の爲めに斯く賤き姿に身を窶し間者に入らるゝも、我等が此の城に籠城するも、人臣の分を盡す勤めでおぢやる。若し我等も初めの考へ通り何處までも籠城いたして、敵を此の城に引受くる覺悟でおぢやれば、城内の形勢を秘密にいたさねば成り申さんが、今日では御承知ある如く主も無きもの、數日の後は城受取の役人衆に明渡し申すまでゞおぢやるで、秘密を守つて其の許に腹切らすにも及び申すべき、失禮ながら我れ等其の許の御心勞に免じ、お望みを協へて進じ申さん、御遠慮なく我れ等の後へ尾行てお出でなされい、城内の模様隈なく御案内いたすでおぢやらう。』

と言ひつゝ先に立ちて隔意なく、こゝは本丸だ、これが二の丸と一々指し示して巡覽さする。間者はその雅量あるに感泣して、只管にその高風を慕ひ幾度か姓名を尋ねんとしましたが、差控へ〳〵しつゝ巡回いたすうち、最う堪がたく成り、

『甚だ卒爾ではおぢやりまするが、其許様の御姓名を伺ひたう存じ申すが……』

と只だ〳〵感嘆の餘り口を切つた、忠左衛門は笑みを含み、

『名のある程のものでおぢやらぬ。』

と云ひ、またスタ〳〵歩きて、尚ほ仔細に城内の様子を語る、間者はいよ〳〵其の大量と云ひ雅懐と云ひ尋常のものならずと察し、再び口を開き、

『御姓名は何と仰せられまするや、御漏し願はしうおぢやる。』

と尋ねまする、夫れが如何にも欽慕の念に堪へられぬから出るので、其人を尊敬するの結果でございます。忠左衛門とて其の擧動は見て取つて居りますから惡くは感じま

せんが、名乗るべき筋でない。

『いや、其の儀は……』

と輕く避けて、また少し歩行ますると、彼れは三度口を開きました、

『憚に御煩くおぢやらうが……何卒御高名を……。某は……』

と今度は我が名を名乗んと致しますので、忠左衞門は急に之れを押し止め、

『御姓名は承はるまい、拙者も御免を蒙るぢや、先刻も申しておぢやるが、人は各各その主の爲めにする、拙者は其の許の御苦勞のほどをお察し申しあげ、御志を聊か御助成いたさんと存寄つたまでゞおぢやる、今日の場合拙者として名乗申すことは罷り成らぬぢや、また其の許の御姓名を承つたとて拙者に何かせん……お語りやるな、拙者も語り申さん。』

と云へば間者は感じ、

『御高諭のほど耻ぢ入つておぢやりまする、然らば御尊名も伺ひ申しますまい、某も御言葉に甘へて申し出でまい……』

『それが宜しうおぢやる。』

と忠左衞門はまた間者を引き連れ、城内殘る隈なく案内し終りまして、

『是れにて最早見殘された場所はおぢやるまい、尙ほ御所望の所がおぢやれば御遠慮なく仰せられい、拙者の御案内を致さるゝ限りは何處にても……』

『段々の御芳志恭なふ存じ奉つる、御蔭に依り御模樣詳しく拜見ないたいて滿足におぢやりまする、此の儀は厚く御禮を申したうおぢやる。』

と慇懃に禮を申しまするを、忠左衞門は

『御滿足下されて拙者も執着に存じ申しておぢやる、お望みの達し申した上は、是れにてお別れでおぢやる。』

と自ら先に立ちて間者を城門まで送り出し、こゝに袂を分ちました。此の間者といふは讃州高松の城主松平讃岐守頼常の家臣に、其の人ありと知られた竹井金左衛門といふ天晴の士でございました。

竹井金左衛門は後々に至るまで當時のことと言ひ出でゝ、武士は斯くあり度ものである、高風と云ひ雅量と云ひ、彼の如きは義士中錚々たる人ならんと、常に赤穂義士の話の出る毎に歎稱して居ましたが、後に細川家にお預になつて居た一人吉田忠左衛門が、赤穂城中を警戒する時、感心な間者を捕へた事があると云た由を傳へ聞き、扨は彼の時の武士は吉田忠左衛門であつたか、我が推量に違はず多くの義士中で大石内蔵助の片腕と成り、百難を凌ぎ討入の當夜は裏門の大將となつて衆を指圖し、讐敵の隱れ所を見出して本懐を遂げられた人ほどあると、ます〳〵敬慕の念禁ずる能はざるものがあつたと申します。忠左衛門の豪いは素よりでありますが、此の間者に入つて見現されても惡びれず、我が過失の功名の誇りませんで、只管恩人を崇敬する竹井金左衛門と云ふ人も、是れまた尋常一様の人でありません。

二七　唯是れ金の奴隷

赤穂籠城の風説は隱れなく、公儀の役人も眉を顰めて淺野家の一族に鎮撫方を命ずる程でありますから、遠近に震駭して泰平の眠を覺し、國境の接近する諸侯はそれぞれ兵を繰出して、之に備へる防禦が忙しく、今にも大亂の起る如く騒々しい形勢となりました、殊に城受取の御役を仰付けられた、播州龍野の城主脇坂淡路守の家中、備中蘆守の城主木下肥後守の家中は、軍兵を率ゐて赤穂城下へ乘込むのでございますから、其の騒ぎは一通りでありません。赤穂には山鹿流の軍學兵法を究めた代城大石内蔵助あり、彼れは今より八年前元祿六年十二月備中松山の城主水谷出羽守勝資が俄に

卒去し、家を繼ぐべき者がなくて領地を沒收されたとき、松山の家中は鼎の沸く騷ぎで、赤穗城中に於ける今度の騷ぎに異らぬ籠城の風説も立ち、甚だ穩かならない形勢であつたので、淺野内匠頭が城受取の役目を蒙つて松山へ乘込む時、内藏助は隨從して一隊の兵を率ゐ、松山の家老鶴見内藏助との談判に、智惠と謀言を以て双に血を塗らないで無事に城を受取つた手柄もあるは、未だ幾年も經過ぬ事でもあり、主家の安危に激昂する松山の家中を、三寸不爛の舌一枚で鎭撫した大器量は敬服させて居るので、此の度も家中一致して籠城をなし、内藏助が麾を採つて之れを手足の如く使ひ、智謀を搾つて反抗を試たらば、何ういふ騷ぎに成らうも知れぬと、近國の大名は頭を痛めた中に、脇坂家では城中から火蓋を切つて放す曉には、第一番に彼れと對陣せねば成らぬ役目であるから、一層これに對する防禦の手段を回らさねばならぬ、その頃にはまだ大砲といふものが稀れであるのに、赤穗には二挺の大砲の精巧なものがあつた、是れを櫓より寄手へヅドン〳〵と打込まれては、將棋倒しに軍兵を傷めて容易に攻め寄せることが難いと、細作を赤穗の城下に入り込ませて、家中の決心を探索しましたり、大砲を扱ふ掛の人々を物色するなど、更に油斷なく防ぎ方に心を配つて居りました。

然るにこの大砲を預るものは、赤穗では第一の素封家と聞え、近國切つても彼れに楯突く富裕者はあるまいと評判されます、百五十石を領する荻野兵助、その弟で百石を領する荻野儀左衞門である、金と灰吹は溜るほど汚ないとか云つて、金を溜めて山吹色を愛する者は、兎角吝嗇に落ちる、出すものは舌を出すにも逡巡する代り、貰ふものなら眞夏の牡丹餅プンと臭ひが來ても手を出す始末、利殖の道に掛けては神經が過敏で、浮世をたゞ金、金の爲めには名譽も絲瓜ほどに思はず、義理もなければ人情も知らず、山吹色の匂ひを此の上もなきものとして居ますから、大野九郎兵衞等とは

意氣投合して、家寶什器は積で山を爲すばかりで、彼が赤穗の大砲と他藩で評判されて、脇坂家にて第一に懸念された二挺の大砲も、實は淺野家の武器では無くて、荻野の倉庫に秘めらるゝ什寶でございました。

脇坂家の細作はこの噂を聞くと直ぐ本國に知らせた、持主が左様の人物ならば、利を以て誘へば大砲は此方へ巻揚げること、左して難きにあらざるべしと、早速これを買入れんと赤穗城下の町人に手續を求めて、荻野兵助をそゝのかさした。

『旦那様、今日はひよんな賴まれもので伺ひましたが……』

『ハヽア何ぢやの、ひよんな賴まれものと申すは……』

『ヘイ〳〵、夫れが何でおぢやります、斯様な儀を申し上げましては、御立腹に相成らうも知れませんが、御宅様に御秘藏遊します大砲を、是非お讓り受け申し度と仰せられる方がおぢやりましてな。』

『オヽ、あの大砲か……あれは家の寶ぢやからの、讓るなどゝ申す儀には參らんよ。』

『左様におぢやりまするかな、夫れは困りました……素より無理なお願ひと存じましたが、御宅にお仕舞置き遊しても何の御用に立つ儀でもおぢやりませぬから、手前共はホンの寶の持腐れ……是れは何も意外麁相を申し上げまして、イヤ兎角手前共は御家中様の御心持を辨へませんので、思はぬ失禮を……』

『ナニ、左様に託るには及ばん、お前の言ふところは一理ある、用にも立ぬものを仕舞込で置くは成程寶の持腐れに違ひないのだ、その持腐れを讓れといふは何人でおぢやるか……次第に由らば相談に乘つても苦しうないぢや。』

『是れは有難ふおぢやりまする、其のお方は或るお大名様でな……旦那様、お手放しに成るなら今でおぢやりまするぜ、ウンとお吹き遊しても大抵は御相談に成らうと存じまする。』

と町人は利から導きて頻に油を灌ぎ掛ける、荻野兵助も暫く考へて見ると、御家は滅亡して家中の生命知らずは籠城〳〵と騒いでゐるとき、自分等はそんな中に巻き込れて籠城などする了簡は更々ない、籠城をしないとなると匆々立退きである、持歩きに不便な斤量の重い大砲だ、是れは價よく讓り渡して金に替るが當世、買主は誰であらうと構ふ事はないと決心しました。

『價よくば……併弟にも一應相談いたいた上で……』

『へイ〳〵御尤におぢやりまする、何うか精々お讓り渡しの儀を願はしう存じまする

て……』

と町人は歸つた、兵助は直ぐ弟儀左衛門を招いで相談する、是れも兄に劣らぬ慾張ものでござりますから、忽ち賣拂ふことに成つて、百兩といふ高價で到頭脇坂家の手に落ちました。

荻野兄弟は獨り悦に入つてホク〳〵して居ますと、此の事が忽ちパツと家中に知れ渡ると大變な騒ぎ、人々の氣が立つて居る時であるから堪らない、荻野兄弟は人非人の奴である、明日にもあれ向ふに廻して一戰を試なばならぬに、龍野へ大砲を賣渡すとは怪からぬ、言語同斷な奴等だと憤慨する、血氣の壯年輩は腕を扼して怒り、

『彼様人でない奴は性根骨の折れるまでに懲して呉れねばならんぢや、押掛けてまゐつて打た斬つて了ふがよい。』

と一人が敦圉けば、

『畜生同様の奴を斬るは刀の穢れでおぢやる、斯様な奴を懲らすには仕方がある、來月は華嶽寺に於いて殿様百ケ日の御法會がおぢやらうがな、鐵面皮な奴であるからノコ〳〵出て來るに違ひない、彼奴等兄弟が參詣に來たと見るならば、構ふことはない其の場で引捕へ、眞裸にいたして謝罪をさせ、阿房拂ひにして呉れう。』

『ハア、、夫れは快い儀でおぢやるが、柔順に謝罪すれば好いか、彼奴等では些とは外聞位は心得て居らう、抵抗し申さぬにも限らないぢや。』

『左様の時は刀で斬るは穢れと相成るに依て、棒にて撲殺すまでゝおぢやる。』

と家中の義に勇む壯年の鼻息は頗る荒い、途中往來にて出會したら面に唾きして、荒騰挫いでくれうなどと口走るもあつて騒々しい、之れを聞ては荻野兄弟も油斷がならぬ、外出するにも前後左右に氣を置かねば放心して居られません、若し横丁から飛出してポかり一つ喰てからは、最う間に合ないので風の音犬の吠るにもビク〳〵と心を配り、戰々兢々として常に易き心もありません、斯うなると見る物も聞くものも皆恐怖の種となつて、居ても起つても心配で堪らず、

『何うだね、斯う馬鹿者等に狙はれては仕方がない、遲いか早いか退散するのぢや、足下の明るいうちが當世でおぢやるて。』

と兵助が遁れる相談に、弟の儀左衛門も、

『その事〳〵、此様時に三十六計の奥の手が肝要でおぢやる。』

と同意して兄弟が逸早くドロンと姿を隱しました、金も財寶も何時の間にやら運び出して、たゞ殘つたは屋敷ばかり……是れも大方旅寢の夢に見て居たでございませう。

二八　悲慘なる哉孤城

城受取の役人は到着する日が迫つて來た、城を受取に向はるゝ正使は脇坂淡路守木下肥後守で、副使は御目付荒木十左衛門、榊原采女であるが、實際に城を受取る衝に當るは御目附二人であつて、城附郷村を受取る人は石原新左衛門、岡田庄太夫でございますから、この人々の赤穂へ着されて宿泊さるべき宿は、それ〴〵表に大きな建札が出された。

荒木十左衞門殿御宿　紙屋四郎右衞門
榊原采女殿御宿　笹屋新十郎
石原新左衞門殿御宿　柏屋道閑
岡田庄太夫殿御宿　和泉屋正因

斯くして其到着を待ち受け、準備は總て整ひ、手配萬端チヤンとして一も手落なく、城中城下とも表面から見たところでは、平常と少しも變る體なく靜穩に謹愼して居ります。

全體この赤穗の城は、淺野家の先祖内匠頭長直といふが、常州笠間から城土を此處に移したのであつて、元は陣屋で城は無かつた處を、長直は城の無いのは如何にも寂しい、一朝事ある時は防禦をするにも困るかち、自ら財を掛けて城を築き度と親類方にも相談をしたけれども、泰平の御代に城を築くといふこと法度と成つてゐる、公儀へ願ひ出した處が到底も駄目であらうが、長直の舊領笠間には城があつた、然るに赤穗には城がなくて甚だ振はない、其の身に落度があつて國替に成つた譯ではなく、何とかして城を築かんと本家藝州侯にも依頼されました、本家でもその胸中を察して周旋される、殊に當時御老中の筆頭であつた水野大監物に入懇の相談をされたので、只管その取持を頼まれました所が、御老中筆頭の勢といふものは格別な者で、御老中若年寄と列席しても御老中筆頭の言出したことに對しては、所謂鶴の一聲であつて若年寄は勿論、次席の御老中でも反抗することの出來ない大權力があつたものだ、其の水野大監物が先棒に成つて盡力されたから、無理も通つて特別の思召しといふお許しを被むり、新規に築きあげたが赤穗の城でございます。

この城を築いたは小幡景憲の門人で近藤三郎右衞門が丹精を籠めた築城で、本城は縱が五十間横が八十間で天主閣が層々として雲に聳え、萬里の眺望を一目に歸して居

ります、二の曲輪には周圍八百五十間、三の曲輪には周圍百六十三間を有し、東には鷹取山があり、西には猪池山といへるあり、山海を帶びた地形堅固であるばかりでなく、庄は五ケ庄、鄕は三ケ鄕、村數は九十六ケ村あつて、城下の町々は甍を列ね軒を並べて賑しく、道路の如きも淺野家の領地とならぬ前は、周世坂といふのを越て百日堤より姫路街道に出ましたが、鷹取坂を越えて姫路への街路を造るなど、總ての便利がはかつてある城で、中々五萬三千石の城とは思はれぬ處でもあり、此の城を築くに就て先祖の苦心經營を思へば、誰も容易に開城しやうとは思ひませんから、籠城の風說はます〳〵泰平の怠眠を破つて、天下を聳動せしむるに至りました。

籠城〳〵と云ふことがバツとしましたので、近國の諸大名は夫れ〴〵國境領地境へ兵士を出し、家々の紋所打たる旗幟を押立て、馬標は翩翻と風に靡き幾千萬の同勢思ひ〳〵に、海陸を固める中に備前の岡山松平伊豫守綱政は、家老津田左源太を大將といたし六百餘人の兵士を引率して、國境の蟲上へ堂々と繰出しまする、因州鳥取の松平右衞門督吉明は家老池田岩見を大將として、總勢千餘人の精兵を從へて國境なる米子に陣を敷きます、また海を隔た讃州高松の松平讃岐守賴常は、家老大久保主膳が三十餘艘を列ねて海岸を漕出し、赤穗間近の海上に泛べまして警備する、また阿波の國守松平淡路守綱矩は物頭二組を兵船に操り、また播州姫路の城主本多中務大輔政武、同く明石の城主松平若狹守直明、讃州丸龜の城主京極縫殿頭高或なんどの面々は何れも兵船を海上に浮べて萬一に備へるは物々しく見えまする、猶ほ一族一門の方々よりは鎭撫使として家老を遣はさるゝ者、物頭を遣はさるゝ者もあつた、また曉諭使として相應の家來を派出さるゝ者もあつて、諸家より赤穗へ入込むもの數百人に及びました。

四月十八日副使たる御目附荒木十左衞門、榊原采女、御代官石原新左衞門、岡田庄

太夫の一行が赤穂領内まで到着したとの急使が來た、内藏助は奥野將監と共に中村川まで出迎へまして、

『拙者は故淺野内匠頭家老大石内藏助、是れなるは奥野將監でおぢやりまする、遠路の處態々の御出張、家中一同恐れ入つておぢやりまする、御出迎ひとして兩人此處まで罷り出で申しておぢやりまする。』

と慇懃に禮を盡して慰問し、一行の會釋を受けて、

『是れよりは家中の者をして御案内を致すでおぢやる……拙者どもは失禮ながら此の場より引返し、城内に於いて御待受を仕るでおぢやります。』

と挨拶いたして直ぐ乘り來れる馬にヒラリと跨ると其の儘一鞍搖れば、馬は稀代の駿足、騎手は手練の兩人である、忽ち馬蹄に揚げる砂烟は旋風のごとく渦卷き、一散に城内へ取つて返すや、大手の兩門はサツと開かせ、沿道には水を打たせて塵一つ止めず、家中の面々は各々持場〳〵を嚴重に固める手配り、秩序整然として中々に主無き城の光景とは思はれず、辻々に出しある物見の役人よりは櫛の齒を挽くごとく、只今一行の方々は何れの處まで御到着になつたと、注進は七八度もあつて恙なく宿場と定められたる本陣へ安着されました、この注進を受くると、内藏助と將監は上下を着け威儀を正く城の大手口まで出で、屹然と控へたるさまは凛々しく見えた。

受城使の一行はそれ〴〵暫く休憩すると、家中の案内に從ふて徐々と大手の城門へと乘込んでまゐる、内藏助と將監は共に恭しく之れを迎へまして、自ら先導いたして城内の大廣間へ請じた。赤穂家中の主なるものは忠義一徹の勇志も臆病未練の腰拔侍も、皆一樣に威儀を繕ひ仕候しつゝある、此の時御目附荒木十左衛門は、

『此度本城御召上と相成るに就て、我れ等今日下檢分ないたす、一同左樣心得られるやう。』

と嚴かに公命を傳へましたが、今日は下檢分であつて城を受取るのでありませんから、上意のお書附を讀聞せらるゝことはない、即ち正式で無いのである。内藏助は謹んで

『畏り奉りまする。』

とお受けに及んで、國繪圖願、鄕村帳、城中備附の武器其他什具類の目錄を内覽に入れました、其の整頓してゐること、一目瞭然で何人が見るとも一見して明かに解りますに、御目附も御代官も驚かれた、一應見終られると今度は内藏助と將監が案内にて城中を隅から隅まで見分された、其の掃除の行き屆いてゐること、何れの處を見ても塵一本だに止める場所なく、櫓城壁とも修繕の行き屆かざる處なく、大手といひ搦手といひ、本丸、二の丸、三の丸と到るところの詰所々々には家中の面々犇々と詰めて嚴重なる狀は、今や離散せんとするもの〻如き擧動は少しも見えず、御目附、御代官の通行を見れば一同ハツと下座して謹愼を表し、其の去るを見て直ぐに元の勤務に就く規律、禮容ともに、主なき孤城の内の煩悶懊惱するものとは中々に見ることが出來ませんから、一行の役人も深く感じ入りまして、扨ても〳〵立派なる士どもかな、斯かる時に斯くまでの規律を崩さず、家中の風儀を保たしめる内藏助の器量は、噂に聞き及んだよりも優れた傑物である、城代家老として是れだけの手腕前を有ち、主を辱しめず國を重んずるものが、天下幾人かあらう、大藩の御家老としても恐く内藏助の右に出るものがあらうかと、只管に舌を卷いて畏敬の念を起しました。

二九　肺肝を衝く哀願

城受取の副使荒木十左衞門、榊采女は案内に導かれ、そしてある一室に入るや、内藏助は慇懃に、

『先づ暫く御休息遊し下されまするやうに……』

と請した、兩使は室内を見廻しますと一層綺麗で、内匠頭の居間と察せられ、其の有様は今も尙ほ世に在るが如き體で、自から襟が正されるやうでございます、兩使は思はず敬意を表せられ、肅然と容儀を改められる、此の時内藏助は末座に平伏しつゝ、恭しく一篇の歎願書を差出しまして、

『此の度内匠頭儀不調法に依つて切腹仰付けられ、續いて城地御召上げの御沙汰に就いては、松平安藝守様、戸田采女正様よりのお諭しもおぢやりまする、我れ〳〵は主人を失ひ國は亡び進退谷つて居りましたが、吉良様には依然として公儀へ御勤め成され、時めき在すを見ましては、今日ノメ〳〵と各々様方に拜謁を仕る事は面目次第もおぢやりませぬ、然るに今日只今まで恥を忍び生を竊みて斯くいたし居りまするは、偏へに内匠頭の舍弟大學控へ居りまする故におぢやりまする、我〳〵の所存に就ましては、曩に戸田采女正様にお縋り申し、只管に哀願し奉る存寄りにて、特使を江戸表へ差立てゝおぢやりまするが、既に各々様方には御出發遊されました後にて、如何とも力及び申さず、城邑殘らず謹しんで御返上申し奉りまする儀に、涙を呑んで決議いたしておぢやりますが、御上に於いても知し召さるゝ通り、我が淺野家は祖先彈正少弼以來權現様御取立の家筋でおぢやりますれば、格別の御恩典を以て大學儀に内匠頭の跡目仰付けらるゝやう、家中一同より只管に哀願し奉る儀でおぢやります、萬が一にも此の御願ひ御詮議に預り、有難き御沙汰を蒙ることを得申せば、我れ〳〵一同は内匠頭の墓前に割腹いたし、人臣の分を完うせんとは豫ての覺悟におぢやりまする、この微衷何卒御憐察下し置かれ、家中一同の哀願御執達のほど、幾重にも御願ひ申し上け奉りまする。』

と述べました。其の場所は壯嚴なる内匠頭の居間と云ひ、是れを述ぶるものは城代家老として天下に名を知られて上使に對する處置振の一點非難すべきなく、而も忠義に

凝たる滿身の熱血を注いで赤誠を吐露いたしたのでございますから、非情の草木にあらざる以上は、如何に冷靜の頭腦を有するものにても心情の動かざらんやで、上使も內藏助の胸中を察して私に暗涙に咽ばれたが、役目の手前輕々しく挨拶は出來ません、唯だ纔に頭を垂れて輕く首肯かれたのみであつた。

室內の檢分は了つて兩使は元の廣間へ還られた、內藏助は再び謹嚴なる態度を以て口を開き、

『當淺野家の御公儀に御奉公申すことは四代に亘りて久しき儀でおぢやりまする、內匠頭の曾祖采女正長重、大坂御陣に從ひまして聊か手柄いたいたに由り、豪德院樣より御取立の御沙汰を蒙り、祖父內匠頭長直に至り笠間より當赤穗に移りましたる時も、格別の思召を以て當城を築くことを御免下されし有難き由緒もおぢやりまして、父采女正長友を經て不調法を仕りたる內匠頭長短と相成り、破格の御恩遇を受け申した家柄でおぢやりますれば、內匠頭も日夜家臣を戒め、一意たゞ御奉公を勵むやうにと勤め居りましたが、一朝不幸にして私の怨みを晴さんと心得違ひを致し、御尤を蒙りて今日の儀となり申すこと、家中一同深く殘念に存じ痛心の外おぢやりません、重ねて申し上げるは恐れ入つた儀におぢやりますれど、何卒この場合御憐察あそばされ、祖先以來に御奉公振も御斟酌下し置かれまして、跡目の相立ちまするやう御恩典の御取做、偏に願はしう存じ奉りまする。』

と平伏した。

既に內匠頭の居間に於いて赤誠迸しる縷々の哀訴に、內藏助の胸中を汲みて一言一句肺腑に泌み渡りあるものを、又こゝに繰返されては『有難い御沙汰を蒙ることを得申せば、我れ〳〵一同は內匠頭の墓前に割腹いたし、人臣の分を完うせんとは豫ての覺悟におぢやりまする』と言つた語氣に無量の力は籠つてゐた、其の時の內藏助は巍

然として何物も犯すべからざる態度が見えた、若し許されざる時はこの儘手を束ねて空しく死する者でないと、口にこそ言ひませんで言外に溢れて、慷慨悲憤の狀は物凄いやうに顯はれて居ることが眼前にチラ〳〵いたして、知らず識らず悚然と秋風肌膚を刺す如く感じ、御目附も御代官も互に顏を見合せました。

この時御代官の一人であります石原新左衞門は、容儀を正し少しく乘出しまして、『内藏助の心底、家中の存念、餘儀なき事と察し申す。』と簡單に挨拶せられて、一行は本陣へと引き揚げました。

下檢分の濟みたる上は、明日にも城明渡しの御沙汰あらんと、内藏助は此の上にも手落なきやうにと家中の人々を勵まし、奥野將監を對手に書類の取纒めをして居る處へ、御目附荒木十左衞門の使者が來て、大石内藏助殿に御意得度し、早々旅宿まで來るやうにと傳へまする。内藏助は直ぐ本陣紙屋四郎右衞門方へ赴くと、御目附も御代官も列席にて、

『是れへ〳〵。』

と招かれましたが、内藏助は遙か末座に平伏するを、十左衞門は、

『遠慮なう進まれい。』

と隔てなく扱はれますに、三尺ばかり膝行出ますれば、十左衞門は改めて、

『今日當領内に入りしに過る處の道路の掃除、橋梁の修繕、城下の制度能く行屆き、殊に城内にあつては家中の謹愼、帳簿より目錄に至るまで能く整ひ居りしは、一同深く感じ入り申した、公儀を重んじ申さるゝ仕方、御奉公振の手本と相成り申さん、また城中に於いて其方の申し出に就ても何等返答いたさず、定めて不滿足に有つたでおぢやらうが、役目の手前是非がおぢやらぬ、哀願の趣きは我れ等に於いても尤の儀と存じ申す、其方の心入の御奉公振、まつた申し出の一伍一什、具に御上へ言上

の使者を相立て申したに依て、公儀に於かせられても定めて御感に入らうと存ずる、是れ大學殿の御仕合せと相成り申さん、此の度の儀につき其方の胸中さこそと察し入る、我れ等歸りなば御老中方へも精々願意の趣き取次方を添へ申すでおぢやらう、尙ほ家中一同の當地を去るも、此の儘居着も各自の勝手に委せ申すが、若し立退き申すものには夫れ〳〵手形を渡せば申し出られい。」

と言渡しましたので、内藏助は、

『有難く存じ奉る。』

と挨拶し歸城する。

城中では如何なる御用であらうか、城明渡しの御沙汰ならんなど想像いたし、有志の面々は今更のやうに思はれて悔しく、既に復讐といふ密約はありますものゝ、累代の領地殊にこの城は先々代の殿様が、一方ならぬ苦心經營に成り破格の御免あつて築き揚た城でありますから、憤慨に堪ませんで憂へ沈んで居る、處へ内藏助は歸つて來て首尾の一々披露いたしました後、ほつと一息つき、

『御目附よりは上首尾の御内意は承はるものゝ、是れを當にいたいて心を安んじては居られ申さん、唯だ我れ〳〵の願意を斯く強く申し上げて置かば、今日この處に殉死せざる譯を、後々に覺らるゝ時期がおぢやらうまでぢや。』

と云つて歎息しました。その用意の周到なること、深慮遠謀なること寔に驚くばかりである、此の智慮あり謀略あればこそ、敵を欺き味方を抑へ、最後の本懷を達するを得たのでございませう。

三〇　軍馬城外に嘶く

卯月中旬を過ぎた十八日、長き日影も西に落ちて孤城に亦く蟬き、若葉を渡る夕風

軍馬城外に嘶く

の何となく寂しく、城明渡しの御沙汰は明日なるらん、明後日なるらんと待るゝでは無いが、氣に掛りてある折しも、國境に出しある物見のものより注進が來ました。

『播州龍野の脇坂殿には、大勢の軍兵を催され、只今鷹取峠に打ち掛られておぢやりまする。』

と息を切て駈け附けました。是れを聞きゐる内藏助は少しも騷げる體もなく、

『さては、此の城の明渡しも明日と相成りたるか……今にも御目付衆より御沙汰あらん。』

と豫て期したる事でムいますから自若として沙汰のあるを待て居る。第二の注進はまた城中へ馳せ込んだ、脇坂勢の先手は既に鷹取峠をエイ〳〵聲にて越えんとしてゐると云ふ、然れば脇坂勢は大手より掛る結構と見えたり搦手より、來るは蘆守の城主木下肥後守の率ゆる手勢ならん、夫れにしても猪池越へ出しある見張より何の沙汰なきは不審しと、心窃に疑ひを抱き居りまする時、城受取の副使たる御目附荒木榊原の連名にて、開城は明十九日の朝卯の刻との御沙汰であつた、卯の刻といへば今の午前六時で夜の引明けでございますから、家中の面々は流石に憂ひの色を增し、臆病未練の者でも祖宗以來この城を仰ぎ、赤穗の家來と押も押れもせずありたるに、いよ〳〵城を離れ流浪するかと我が身の上より、悲哀の情に迫られまして轉た歎いて居ります る、況て慷慨の志ある者に至つては、噫この城と分るゝも今宵限りと成つてけるか、是れに附ても恨み重なるは吉良上野介である、やはか其の儘安穩に置くべきか、天に翔り地に潜るとも不倶戴天の讎を報はで止まんやと、切齒扼腕いたしました、默然としてありました内藏助は自ら城内を巡回いたし、士卒を勵まして、

『方々の勤めも今宵一夜でおぢやるぞ、油斷なく役向に落度の無きやう致されい、今夜が後奉公納めぢやほどに……』

と懇に戒めさせ、猶ほ

『方々も聞かれしならんが、脇坂様には既に大勢を引具せられ、大手へ向はれたりとの事でおぢやる、然れど此の城を明渡すは明朝卯の刻でおぢやるから、夫れまでに指一本さゝるゝことがあつては、御當家の耻辱と相成る譯……又城受取の上使が指圖とあつても、明朝までは一兵一卒たりとて、城内に亂入させては成り申さん、お城の諸門は固く閉めて出入を嚴重に注意し召されい……城の警固に掛る方々は徹夜とお覺悟あられたうおぢやる。』

と言渡し、火の用心を始めとして殘る處なく注意をしました。

赤穗城受取の正使を仰付られました播州龍野の城主脇坂淡路守安照は、いよ〳〵四月十九日が城受取の當日と極りましたので、十八日の申の上刻只今の午後四時といふに、總勢四千五百四十五人の軍兵を催し堂々と龍野を出發いたし、肅々として鷹取峠を越え陸村より那波、佐方を過ぎて赤穗城下へと差向ひます、素より途中に於いて支へるものゝ有る譯でありませんから、其の夜の戌の刻即ち午後八時すぎる頃には無事に犇々と城下に乘り込み、大手に向つて本陣を取り的幟を夜風に飜へし、高張を揭げて備へを立て、士卒は弓鐵砲は申すに及ばず、槍組など各々得物えものを携へ、軍馬は城外に嘶きて、素破といへば大手より攻め寄り、一揉みに揉み潰さんづ勢ひを示し、威を四邊に揮ふて控へるは目覺しく見えました。

龍野の陣營よりして使者を城中に送りまして、

『當城在番の台命を被り播州龍野の城主脇坂淡路守差向ひたり、開城の儀は明十九日卯の上刻と御上使荒木十左衛門、榊原采女より申し聞けたる由聞き屆けたり、屹度違背あるべからず。』

と嚴かに通達される、内藏助よりは

『畏り奉る。』

とお受けに及んで、ます〳〵非常を戒め、家中のものも一人とて眠ることなく、指揮に從つて持場々々を固める狀は恰も對陣するに異らぬ趣きがあつた。脇坂勢は大手に臨んで大膽なる陣形を布いたの取沙汰あり、誰いふとなく、

『龍野の陣中には、彼の人面獸心の荻野兄弟の賣つた大砲がある、いざと云はゞヅドン〳〵と打て放す氣と見える。』

と噂とり〴〵なるを、血氣旺んの壯者等は口々に、

『ナニ、脇坂の陣に大砲が二挺三挺あつたとて何の恐れを抱くことのおぢやらう、彼の備へを見られい、大將の本陣に高張提灯を揭げる何事ぢや、若し此方は石火矢を釣瓶打ちに打ち掛けたら、見る〳〵間に陣所は骨破微塵となつて敗北するでおぢやらうに。龍野侯は仕合ものでおぢやる、我れ等が柔順に此の城を明渡すので生命拾ひされた……』

斯樣な罵る言葉が耳に入りましたので、內藏助は深く之を戒め、苟且にも公儀より差向られた受城正使を誹謗するは宜くないと諭して、自分も大手の櫓に登つて脇坂の陣を瞰下しますと、若侍等の噂に違はず、本營には定紋打たる提灯を高々と揭げ、其處此處には篝火を焚くもあり、月は皎々と照して居りますから、陣形の模樣は有々と手に取る如く見えました、龍野侯の本營を眺めて居た內藏助は莞爾として

『流石名家の後だけあつて、脇坂殿の陣備へは見事でおぢやるが、元龜天正の世とは城を攻むるにも城を守るにも自から變るものぢや……』

と云つたのみで櫓を下りました、旗幟を翻へし高張を輝かすは敵に的を示に異らずと冷笑したと云ふ事は、諸書に見えまする事であるが、內藏助ほどの智慮あり大抱負を持つものが、斯かる事を放言したとは取受りかねる傳說で、是れは義士の聞書といふ

書にある壯年血氣の輩が、とり〳〵に噂をしたと云へる方が事實のやうでありますから、此處では其の說に據ります。

夜は更けて世間は寂寥となつた、城中は常に變りて活動するもの〻、何處となく濡り勝にて陰鬱の氣が滿ち、夏の短夜は早や東の空は白み、今一時にて此の馴れたる城を去るのかと思へば、誰とて好き心地はせぬ中に、內藏助は慨然として昨日を思へば、備中松山の城主水谷出羽守の城地を召上げらるゝ時、我れは殿樣のお伴にて其の當の敵であつたが、昨日は人の身の上今日は我が身の上、あゝ此の城もと、窃かに暗涙に咽ぶ時しも、猪池越に遣し置きたる見張から注進が來た。

『蘆守の御城主木下樣は、六百有餘の御同勢にて今猪池越に掛られておちやります、間もなく御城下へ込み入られませう。』

との事である、早最覺悟の上である騷ぐことはない、然らば卯の刻も間近である疏略のないやうにと、手配萬端に注意して城內では待つばかりでございます。

備中蘆守の城主木下肥後守利康は、精兵勝つて六百餘人を引率し、城下を發して途中も揉みに揉みつゝ、脇坂勢に後れを取るなと犇めき〳〵猪池越へと差掛りましたが、龍野より來ると、大分道程が遠い爲め、漸々東天白みかゝる頃猪池越に來り、時は後れさうだ、城受取りは卯の上刻なるぞ、急げ物ども進め〳〵と勵ましエイ〳〵聲を掛けつゝ、山溪、有年村を馬蹄に砂塵を蹴り歩行は足地に付かざる迄に急ぎて駈けつけ、赤穗の城下へ列を亂さず堂々と込み入りましたは、十九日の昧爽東天光を發ちて朝日の昇る頃でございました、夫れより直ぐ搦手の方を壓して陣營を布き、勇める駒は曉天に嘶き渡り、劍戟は朝日の光りに映じ、萬一抵抗もしたらんには、城門を一擧に乘取り兵士の精鋭を示しくれんと、鎭靜り返つて控へるさまは天晴勇しく見えまする。

三一　嗚呼四月十九日

曉風靄を破つて朝日の匂ひ朗かに、寂しき孤城を照して櫓城壁の白堊に輝き、雲に聳ゆる天主閣も悄然と哀れに見える中を、群る烏の飛び翔けりて啼き叫ぶは、心ある家士の腸も斷つ思ひに沈み勝でございます。

城受取の正使である脇坂淡路守と木下肥後守の陣所の間に使者の往復がある、副使荒木十左衞門榊原采女との間にも數回の往復が濟むと、脇坂木下の兩正使より城内に使者を遣はしていよ〳〵受渡しの實行を求めました、城中では期したることである、大石内藏助奥野將監家中を代表して、

『委細畏り奉りまする、いざ御入城下されい。』

と口上に挨拶し、直に命令を一般に傳へまするや、嚴重に閉されて蟲螻蛄一匹の出入も疎かにせず、假令城外の寄手が一時に攻掛るともやはか開くべきかと、警固の士が固く守りました大手の城門は、忽ちさつと押し開かれる、門内は昨日に變らず水を打ち箒目を正しく入れ、警護の家士は左右に開きて肅然と控へるさま、今面前この城をムザ〳〵渡すものとは思はれざる趣がある、是れに準して搦手の鹽谷口、または東總門、西總門、川口門、西仕切門、刎橋門に至るまで扇を左右に打ち開きて、警固の任に當る家士は嚴重に控へました。

城内よりの挨拶を聞きて大手口よりは先づ御目附荒木十左衞門、榊原采女の兩副使、御代官石原新左衞門、岡田庄太夫の兩人が供廻りを具して乘り込みまする、夫れに續いて正使脇坂淡路守の軍勢は肅々と入城する、また搦手よりは同じく正使の一人木下肥後守が手勢を引率して犇々と進み入りまする、赤穗の家士の固めましたる諸門は申すに及ばず、櫓々その他の警固は兩家の兵にて取て代り、此處には脇坂家の軍兵が

槍を扱き刀に反打たせて物々しく構へれば、彼處には木下家の手の者弓弦を鳴らし火繩を振つて我が物顔に威を示します、是れを見る家士の面々は今更ながら唯腸の煮沸る心地で聲を潜める氣の毒であつた。

正使脇坂淡路守木下肥後守、副使荒木十左衞門榊原采女、および石原新左衞門岡田庄太夫は、城代大石内藏助と奥野將監の案内に連れて本丸の大廣間に請じられました。此の時副使の荒木十左衞門は恭々しく御奉書を取り出して座を進み、

『上意！』

と最と嚴かに叫びまする、内藏助と將監は遙に下つて平伏する、正使副使その外の者とて上意の言葉に手を疊に突きて畏りまする、十左衞門は戰々兢々として、

『此度淺野内匠頭儀、勅使御對顏の節をも辨へず、殿中御座近にして狼藉の働有之に付切腹被仰付、是に依而城地被召上候事。元祿十四年月日……』

と讀み上げ、正使同僚等に會釋して復席いたしまする、既に下檢分は濟でゐることである、今日は正式に上意を傳へるまでゞございますから、内藏助より、

「畏り奉る。」

とお受けをして、豫て整へある諸記錄諸帳簿類を謹んで捧げ了りまするとと、内藏助は一層謹慎の意を表しつゝ、

『謹んで本城御引渡し申し上げ奉る、確と御受取下し置かれますれば、家中一同有難く存じ奉りまする。』

と申し述べた、脇坂木下の兩侯も副使より昨日よりの有樣を聞かれて居る、且つ其の秩序整然として一絲紊れず、家中の靜肅にして騷がしき體とて更になく、謹慎を專らとし粗暴の振舞など少しも無きに感歎され、

『萬事に行屆いた致され方、我れ等深く滿足に存じ申す、何かにつけ今般の事體心情

のほど嘸がしと察し入る。」

と脇坂淡路守より會釋されまする、内藏助と將監は只だ拜謝しまして其の席を立ち、外に出ますと家中の者は、此方彼方に一團づゝに成つて屯する、脇坂木下兩家の士は要所々々に警固して嚴しく非常を戒して居りますが、赤穗の家士が悄然として今引揚げんとする悲慘の情には、今の今まで只だ一揉みに蹴散らしてと腕を叩いた氣は挫け、同情の涙を呑んで心ある士は目禮をする、内藏助は泰然自若として少しも平生に變つた樣子なく、一組〳〵と其の率ゐる頭分に命じて、最も靜に引揚げさせ、家中一同が城外の大手の廣場に屯集するを見定め、自ら本丸に至りて、

「只今、家中殘らず引揚げ申しておぢやりまする、拙者もこれにて退散仕るでおぢやりまする。」

と申し上げ、踵を返さんとしますれば、

「大石殿、御上使の御用でおぢやる、暫く御控へ召されい。」

「はッ！」

と再び席に着きますと、荒木十左衛門は聲を掛けられ、

「引揚げの場所は華嶽寺でおぢやるか。」

「仰せの如く兎も角も華嶽寺へ引き纒め申す所存でおぢやります。」

「左樣か……」

と首肯かれる、脇坂侯には近習頭松原幸右衛門を近く招かれ、

「汝、内藏助を大手まで見送り遣はせ、家臣の者に粗忽なきやう注意いたせ……」

と命ぜられました、松原幸右衛門は内藏助の傍らに寄り、

「拙者は脇坂淡路守の近習頭松原幸右衛門でおぢやる、コヽ今主人の命により貴殿を一人手まで御見送り申し上げるでおぢやらう、御遠慮なく……」

『是れは恐れ入つておぢやりまする。』

と挨拶いたし、脇坂侯にも御禮申し上げると輕く會釋される、幸右衞門は先きに立ち大手まで内藏助を送りまして、

『然らば是れにて御別れ申すが、貴殿がこの度の御心勞は容易ならぬ儀で、我が主人もいたく感じ入つて居り申す、拙者今日の御見送りを承はりしは此の上もなき譽れと存じ永く忘れ申さず、近頃以て御無心の至りでおぢやれど、武士たるもの丶龜鑑といたし、我れ〳〵が手本と爲すべき貴殿、御鼻紙一枚にても苦しうおぢやらぬ、御遺物として申し受け子孫に傳へたうおぢやる。』

と欽慕するの餘りに餘儀なく言ひ出だしました。内藏助は迷惑さうに、

『御言葉以ての外の儀でおぢやる、亡國の臣たる拙者、中々以てお歴々なる貴殿方に……』

『イヤ左樣に御謙遜なさらぬもの、松山城の御受取方と申し、申すも御氣の毒ながら此の度の御捌と申し、武士道の神に入る貴殿……無禮なれども其の儀は御許し下されて何卒拙者の願ひを……』

と只管に賴みまするに、内藏助も幸右衞門の熱心を感じまして、

『左程まで御所望とおぢやれば、甚だ失禮ながら、是れを……』

と小刀の　笄　を拔き取り渡しましたに、幸右衞門は押戴き、

『望外のいたり永く御遺物といたし、我れ等の戒めと　仕　るでおぢやります。』

と喜びて袂を分ちました。此の　笄　は後に至り内藏助が復讐の本懷を遂げてより、脇坂淡路守も御覽あつて松原家の寶物として傳へられてあると申します。

松原幸右衞門に別れました内藏助は、數十歩大手を距りしが、主家の凶變に朝夕出入した苅屋の城と今が別れかと思ひますと、萬感交も湧き起つて自ら制せんとしても、

制し切れず、我れ知らず顧みますと、幸右衛門はその心を汲みたるか、猶ほ去らずして悄然と目送しゐるに、あゝ未練であつた、彼の思ふ處も恥かし、我れの大責任を果すは是れからであるのだ。吉良上野介の首級を擧げ亡君の尊靈を慰さめずんば、天下に向ける面なし、大事の前の小事徒らに私情に驅らるゝは大丈夫にあらずと、内藏助は悠然として再び歩み、大手前に屯集する家中の士を引き連れ、淺野家の菩提所華嶽寺へ肅々として引き揚げました、嗚呼忘れんとして忘るべからざるは元祿十四年四月十九日！

三二　血判人名の所望

赤穗城の引渡しは濟んだが、猶ほ殘務があるので其の衝に當つたものは、

大石内藏・助　佐々小左衛門　吉田忠左衛門

原惣右衛門　田中清兵衛　渡邊角兵衛
幸田與三左衛門　前野新藏　出羽利左衛門
木村孫右衛門　堀田政右衛門　木村岡右衛門
鹽谷武右衛門　潮田又之丞　中村勘助
荻野孫之丞　人見半七　橋元次兵衛
矢頭長助　畑勘右衛門　岸佐左衛門
田中德右衛門　吉田貞右衛門

の外帳簿を認めるものである小役人には、

内橋太兵衛　高久藤藏　關彌五七
山野茂右衛門　東惣九郎　長尾源右衛門
川越源三郎　野村平三郎　荒木源助

矢田作平　小山善七　小池甚右衛門

是れ等の人々が殘務を執つて跡始末をつけて居る、又一方には兩御目附より御高札が掲げ出された。その文言は

一今度播磨國赤穗の城被二召上一候間、萬事御法度の趣堅く可二相守一事

一喧嘩口論停二止之一訖、若し違犯の輩あらば双方可三誅二罰之一、萬一令二荷擔一者、其科可レ重三依二本人一事

一猥不レ可二竹木伐採一、幷に不レ可レ爲二押賣狼藉一事

一家中の面々武具諸道具可レ任二其身心一、家中の輩城下引拂の儀、十左衛門采女幷御代官到着より三十日限たるべし、但本人赤穗領に在レ之度輩は、遂二穿索一心次第先可レ措二置之一、立退度族は先々より違犯無可二宿貸一旨、兩人より證文可レ遣レ之事附家中明屋敷の儀は所々町人百姓等可レ勸レ之事

一種借の儀藏より出し貸付の事

一於レ無二疑者一當暮可二收納一事

附年貢未濟は可二寄指一事

一未進方に取使ふ男女の儀、於レ無二其紛一は譜代勿論の事

一借物は可レ爲二證文次第一事

右の通り被二仰出一候間、堅可三相二守之一、若令二違犯一輩者可レ被レ處二嚴科一者也、

元祿十四年四月

柳原采女
荒木十左衛門

赤穗城の受渡しは無事に濟みまして殘務を扱ふ人々も極る、高札の掲示も出た、脇坂家にて當分赤穗城を預ることになつて、木下肥後守は同勢を引き上げられる、江戸より來てゐた義を重んずる有志の中でも、急激家でムいます堀部安兵衛、奥田孫太夫、

高田郡兵衛は開城の翌日、二十日匆々江戸へ引揚げる、間もなく村松喜兵衛、同く三太夫、片岡源五右衛門、磯貝十郎左衛門もそれ〴〵歸つて往きました、また城に離れた土着の家臣も、忠義に凝た有志も不忠不義の腰拔者も、夫れ〴〵に一身一家の處分を圖らねばなりませんから、元の知行所であつた村方在所へ引込むもある、親類縁者を頼りて隣國へ移らんとするもあつて、其の光景は實に見る目も氣の毒のやうで慘狀を極め混雜をいたして居ります。

淺野家の親戚方より差遣はされた諸家の家來も追々引き取りまず中に、本家松平安藝守より遣はされて居た家老井上團右衛門も、城引渡しが無事に濟みましたを見屆け、是れにて役目も終つたから引き揚げやうと、或日本城に伺候いたし御目附に逢ひ、

『開城も御滯りなく相濟み大慶に存じ奉りまする、就ては首尾は如何でおぢやりましたらうか、歸國の上安藝守にその次第を申し聞けたうおぢやるが……』

と申し出でまするとと、兩使は口を揃へ、

『家老大石内藏助の心入れ格段でおぢやつて、深く感じ入り申た。』

と答へられた後、采女は言葉を繼ぎ、

『殊に感じ入り申いたは諸帳簿目錄の整ひ居るのは、御代官方も斯くまでに明細なるは中々の儀と膽を潰し居らるゝ程でおぢやる、是れと申すも御本家の御心添へに寄ることゝ、我れ等も執着に存じ申す、藝州侯へ好しなに御披露頼み入る。』

との挨拶に、團右衛門も面目を施して退ぞき、いよ〴〵歸國と決定したので、昵近に致し居つた進藤源四郎を尋ねた、進藤源四郎は四百石を領して後には變節者の一人でございますが、當時は籠城にも殉死にも、生は鴻毛より輕く義は泰山より重しと叫んで、有志の列に加り連判帳にも鮮血を灌いで血判した者であるから、慷慨悲歌の士であつたのである。團右衛門は

『我れ等もいよ〳〵歸國ないたす、就ては又何時御面會いたされるも知れ申さんに出つて、一寸と御暇乞ひに罷り越しておぢやる。』

『それは態々辱なうおぢやります、殊に此の度は不慮の事より思はぬ御苦勞を相掛け申しておぢやる。』

と源四郎が挨拶を致しまするを、

『御挨拶痛み入ておぢやる……貴殿の御胸中左こそと察し入る、就ては異なことを尋ね申すが、近隣道路の風聞に據れば、各々方は籠城なさる御決定ありたゞやに申し傳へ、如何にも御尤の御事で御忠節な儀でおぢやりまする、其の御姓名を承はり、歸國の上我が君へ御忠節の次第を御披露ないたし、拙者も使に參り君命を辱しめさる證據といたし度おぢやるが、御漏らし下さる譯にも相成り申す間敷や……』

と言ひ出でまするを、源四郎も白徒、拔からぬ顏をして、

『イヤ、以ての外のお尋ねを蒙るものかな、籠城いたすなどゝ云ふこと、固より公儀に對して恐れ入つた次第でおぢやる、左樣の儀を企てましたる事は毛頭おぢやり申さぬ、只だ時宜に依ては城中に於いて殉死いたいて、亡君の御供を爲さんとの相談はおぢやり申した、若しや左樣のことから世間で彼れ之れと風說いたしたのでおぢやろう、然れど其の殉死を企てたものゝ姓名は、城代の手許におぢやりますれば、一應相談ないたした上で無うては御挨拶を申し上げかねますぢや。』

『御尤に存じまするぢや、然らば御城代と御打合されて拙者の望み御適へ下さるやう賴み入る。』

『承知いたいた、直樣城代に聞き合せ申すでおぢやる。』

と進藤源四郎は內藏助の許に尋ね往き、

『御本家藝州侯の御家老井上園右衞門殿より、殉死と覺悟いたし人々の姓名を望まれ

申したが、如何が致したものでおぢやりませうや、大夫の御意見伺ひ奉る。』

と申し出た。内藏助は暫く考へて居りましたが、

『井上氏より我れ等同盟の姓名を聞き度と申さるゝとか……』

『左様におぢやります、歸國の土産にして藝州侯に披露せらるゝ思召しさうにおぢやる。』

『目の着けどころ、流石本家の家老でおぢやる、外々の人よりの申し入れとも違ひ、本家の事であるから、隱し立するにも及び申すまい、同盟の姓名を書上げ申すでおぢやらう。』

とあつて自ら血判に名を署した。六十一人の姓名を書し、源四郎に渡しましたから、之を團右衞門に贈ります、御煎入のほど辱けなしと之れを携へて廣島へ歸つた、藝州の家老井上團右衞門は、赤穗城中の模様を逐一復命いたし、殉死と覺悟したる人々の姓名を藝州侯に披露いたしました。

扨て赤穗の家中は追々離散するものがある、荒木十左衞門、榊原采女の兩御目附も城受取の用向も概方處置がつき、五月十一日に出發して江戸に歸り、赤穗には城を預かる脇坂淡路守の家老脇坂民部と、領代官の石原新左衞門、岡田庄太夫、赤穗の家中では殘務の取扱ひを仰付られた大石内藏助、吉田忠左衞門、原惣右衞門以下となつて、寂々寥々恰も葬式を出した跡の如き光景でございました。

三三　大石良雄の立退

大石内藏助良雄は國に許すの士である、主家の凶變以來只だの一日とて寧日はない、城渡しの大責任を全うして殘務までを鞅掌し、且つ今後に臣子の本分を明かにして、亡君の尊靈を慰めんと誓ふた大きな責任を有つて居ります、而もその對手は高家の吉良

上野介一人でない、吉良家とは切ても切れぬ米津十五萬石の城主上杉彈正大弼をも敵としなければならぬ、僅の人數で大々名の大敵を向ふに廻して復讐を遂げんとする大膽不敵の企てを抱き、臨機應變の處置を取らんとする胸中の成竹を包み、同盟の義士を率ゐて素懷を達すべき期を窺ふ苦心慘憺の情想ふべしであります。

私事を顧ず公事にのみ一身を委せ居りました内藏助も、六月朔日より漸く我が身體となり、妻子を妻の實家である但馬國豐岡の石束源五兵衞に預けて、引拂ひの用意に掛り、召使ひしものには夫れ〴〵手當を取らせ、兎も角赤穗の城下を立ち退き、年頃召使つた老實の僕八助の在處なる尾崎村へ、長男主税と譜代の家來瀨尾孫左衞門のみを具して其の身を移しました、内藏助の妻は但馬豐岡の城主京極甲斐守の家老石束源五兵衞常好の娘であつて、後に香林院と云つた人であるが、其の人は俗名を書たものがないので名が明かでない、淨瑠璃などにお石とあるは石束の姓と大石の姓とに因みて作者が拵へた名であるから、當にならぬ。此時子供は男子二人と女子二人あつた。即ち長男は幼名を松之丞といひ十四歳の主税で、間もなく元服させ父と共に大義に組した義士中の最年少者でございます、次男は幼名吉千代後、吉之進といひ薙髪して祖練と云た、猶ほ一人三男大三郎といふがあつて、程經て淺野の本家松平安藝守に召出され大石外記良康と申しましたが、之れは此の當時はまだ母の胎内にあつて浮世の風に當つてゐなかつた、二人の女子は姉をおちえと呼び後に青山大膳亮の家臣青山藏人に嫁し、妹は進藤源四郎の養女となつてゐた、それで豐岡へ預けたは妻と吉千代女子二人でございます。

内藏助は手振編笠で主税を連れ尾崎村に假に居を定めて居りますと、間なく腕に疔を發してベツタリ床に着く、忠僕の八助は心配して主税や孫右衞門に力を添へ介抱して居る、此の中にも江戸へ歸つた堀部安兵衞などの同志より切々出府を促して參りま

すを、原惣右衛門が引き受け應答しつゝ隱れに充べき處を探させてあつたが、幸ひ京都の山科に一ケ所見付つたので、夫れに寓居を定めることに決しますると、腫物も追追快くなりましたから、愈々出發は六月二十五日とした。

當日の朝に成りますと領内の百姓や町人、扨ては神官、坊主に至るまでぞろ〳〵と見送つて參ります。内藏助は會釋して、

『方々のお見送り過分に存じ申すが、何時まで送られてもお互に名殘の盡きるものでおぢやらぬ……方々も御用も在すことぢや、是れにてお別れを致したうおぢやる。』

『大夫樣さう仰せられいで、最う少しお送り申しませう……切めて中村までなりと參りませねば……』

『さうぢや〳〵、最う是れ切り何時お目通りをされるか知れぬのぢや、成らば山科とやらまでお送り申したい……』

『御厚志内藏助辱なふ存じ申す、然らば方々の御志に從ひ中村まで……』

と人々の厚き情に送られて中村に着くと、一軒の宿場茶屋があつて、此處で、酒肴を整へ來て待てゐる連中があつて、一村殘らず集りました、内藏助も氣の毒に思ひ、

『方々は舊誼を忘れず、斯うして拙者を送つて下さる志大慶に存じ申しておぢやる、厚く御禮を申す。』

と會釋しますれば、百姓等はホロ〳〵涙を溢すもあり、世が世ならお言葉を戴くも容易でない、斯うして親しく有難いお言葉を聞くに付けても、嘸ぞお心の中は御殘念であらうと、一同が同情を以て迎へ參す。

『さア旦那樣、何うか此處へ……』

と腰掛茶屋の奥座敷へ内藏助を案内せんとします、見れは狹い座敷であつて幾人も入られません。内藏助は

『孫左、孫左！』

『はハつ、何か御用でおぢやりますか。』

『此の邊に廣き空地はないか、茶見世の者に聞いて見よ。』

『畏りましておぢやる。』

と家來の瀨尾孫左衞門は、茶屋の亭主に尋ねると、直ぐ向ふの八幡樣の境内が廣いと知らせて來れた、孫左衞門はこの赴きを復命すると、内藏助は首肯き、

『八幡の神社とは幸先が好い。』

と云つて一同に向ひまして、

『方々が折角こゝまで遠く見送り下され、何うやら餞別の宴を張られる御樣子にお見受け申しておぢやるが、此の家の座敷では餘り狹くて、御一同と親しくお別れをいたすに不便でおぢやる、只今家來に尋ねさすれば、あれ彼の向ふの八幡社の境内……彼處は廣いと申す事でおぢやるで、其の廣い青天井で方々と心置きなくお別れいたいては何うでおぢやらう。』

と人々の好意を無にせず、唯れ彼れの隔てなく共に餞を受けんと高振らぬ注意に、一同は喜びながら、

『私共と一所に旦那樣を野天に御請待申しまするは……』

と遠慮する者もあると、内藏助は

『いや〳〵、左樣ではおぢやらぬ、拙者のやうなものでも斯く慕ひ下さる志は辱けない、青天井も却て廣々して心地宜しからうに……』

と飽までも好意を汲みし言葉に、一同は雀躍して折角彼の樣に仰やつて下さるのだと、直ぐ筵蓆の用意をいたし、八幡の境内に席を設けて此處に別れの宴を開きまして、一同は恰も親にでも離れるが如く別れを惜む、内藏助は一々會釋をして盃を酌み交し、

やがて主税と孫左衛門を伴ひ、人々に別れを告げて郷國を離れ播磨の地をあとに山科さして立去りました。

内藏助は主家凶變の報に接した時より復讐の志を抱き、赤穂を退去して一時跡を晦ますには、八幡山崎若しくは山科の邊こそ屈竟の地である、京都に近くして東は江戸西は赤穂と連絡を取るに都合好しと考へまして、彼の籠城を決議した三月二十一日に、男山八幡宮の法印大西坊とは大石家に緣故淺からぬ關係がありますので、窃に之れに手紙を贈つて居る、その手紙は

急ぎ一紙申入候、然者爰元之儀可レ爲二御承知一、不二存寄一無是非一次第、我等家中一同之心底御察可レ被レ下候、様子は其元にて御聞可レ有レ之候、何方へも片付可レ申了簡に候へども、何處へ罷越可レ申心當曾て無レ之、及二難儀一候、就レ夫其邊山崎邊敗山科邊、上下十四五人も居申度、上方之儀不案内に有レ之候 故、浪人など住處に惡きも難レ計被存候、此段了簡被レ致可レ有レ之候、伏見敗大津邊と存候、同くは貴僧近處と被レ存候、其段御聞可レ給候、以上

三月廿一日　　大石内藏助　花押

大　西　坊
西　之　坊
專　成　坊

とあつて、其の胸中に潜む所の何物かを語つて居る事が知れる、彼れの遠謀深慮は既に是れにて明かに知ることが出來る。山科は内藏助は理想の策源地であつて、彼れは第一に先づ此の地の利を得た、此處に在つて苦心慘憺の經營は、後に武士道の花と謠はるゝ復讐の大理想を實現したのでございます。

三四　昔を偲ぶ寛潤姿

青天の霹靂に江戸八百八街の上下を驚かし、武士道の花と謠はるゝ驚天動地の策源地を京の山科と極め、尾崎村を出發いたしたは六月の廿五日でございましたが、其れより三四日前で忠僕の八助は、朝涼に内藏助親子の居る座敷の庭を掃除して居る、當年十四歳ではあるが最う五尺何寸といふ大男、その頃はまだ松之助と云つて居ました主税が、縁端へツカ〳〵と出てまゐり、

『老爺やお前氣の毒だがね、一寸と御城下まで使ひに行つて貰ひたい！』

『はい〳〵畏まりましてございます、夫れでは直ぐ行つて參りませう、はい、御用は何でございますか。』

と箒を捨て端折つてゐた裾を下し、小腰を屈め縁際へ參りました、主税は縁側の敷居の外に手を突き、

『お父上、老爺やが參りましたが、御用の次第は……』

『おゝ左樣か……八助老體を氣の毒ぢやが、城下まで一走り賴むぞ。』

『はい〳〵、直ぐ行つて參りますで……はい此の御手紙を畏まりました、御返事は宜しふございますか、はい〳〵、今日も大分照込んで參りさうにございますな……若旦那樣行つて來ます。』

と八助は氣輕に出て行きましたが、暫らくすると息を喘ませハツ〳〵と云つて歸つて參り、何時になく内藏助の居る座敷の縁側にバタ〳〵と遣つて來て、ベタリと坐つた儘で物をも云ず、

『旦那樣！』

と云つた切りで、只だ口をモガ〳〵させ、内藏助の顏を凝然と視詰めて居ります、内

藏助は老僕の何事にか驚きゐる擧動を察しましたから、微笑みながら、

『八助や、何うかしたかの……何か御城下に變つた事でもあつたか。』

と問ひかけられて漸う胸を撫で下し、

『はい〳〵、旦那樣は、京の山科とやらへお越し成されまするさうで……』

『ハヽア、何處で聞て參つたか……お前にも此度は豪う迷惑を掛けたがの、私も都合あつて近々山科に引越して、暫らく世を氣樂に過さうと存ずるぢや。』

『それは〳〵御名殘惜いことでございまする、八助奴も今少し若うおぢやりますれば、是非にお供をさせて頂き、永の歳月御恩を被りました萬分の一でも御恩報じを致しまするものを、斯う老耄いましては何の御用も勤まらず、是れが今生の御別れかと存じますれば、はい〳〵、御城下で旦那樣が山科へお引越遊ばすと聞きました時は、私は、はい最う落膽いたしてしまひました。』

『左樣か、御家御繁昌の時は、御城代の御家老のと彼是人も云ふてくれたが、今は浪人ものゝ藏助ぢや、それを左程に慕ふてくれるは過分に存ずるぞや、八助！』

『ハヽア勿體ない旦那樣の御言葉……』

と八助老爺はほろ〳〵涙を拂ひまして、

『是れが今生のお別れかと存じまするとはい、私はお名殘惜うて堪りませぬ、切めては何品なりと御遺物を頂き、朝夕旦那樣と存じて拜みたう存じまする。』

と、また涕汁を啜りましたので、內藏助に坐ろに哀れを催し、撲訥な老爺の赤誠を察しまして、

『此度お家の凶變に由り、私も俄浪人と成り、此後何處に賴るべき處もなく、然らばとて再び仕官をいたす譯にも參らねば、山科へ引込みて百姓に成り土いぢりでもして一生を送る所存ぢや、何ぞお前にも取らせたいが心に任せぬ、是れは誠に些少

いが何かの補足にして呉れい。』

と傍の手文庫から十餘片の金を取出しまして、無雜作に鼻紙にくる〳〵と包み、八助の前に差出しますと、老爺は乍ち勃然として目を瞋らし、内藏助を礑たと視仰げ、

『旦那様、八助奴は貧乏至しますれど、お金を頂きたさに御名殘を惜みは申しません、今度お別れ申しましては復お目通りをすること覺束なく、是れが今生のお別れと存じまするで、御筆蹟にても頂戴仕つり、御遺物として永く旦那様の御恩を忘れず、御家に御盡し遊ばしました御忠義をお慕ひ申したい心でおぢやりまする、此度の御凶變に殿様は御切腹遊ばし御家は斷絶いたしますに、吉良様は御無事の上に何の御咎めもなく居らせられるとやら、物の理解も分らぬこんな考爺でも殘念で〳〵堪りません、旦那様などのお胸の中は如何ばかりかと朝夕お察し申して居りましたに、何でございまするか、今承はれば山科へ引込み御一生をお送り遊ばす御所存とは、八助奴悔しくて〳〵堪りません、お金などは要りませぬ、何うかお納め下さい。』

と荒々しく突戻し、齒を嚙みきり〳〵云してすゝり泣きを致しました。

この體を先刻より瞬きもせず老爺の言葉に耳を傾けてゐた内藏助は、胸中に萬感交交起つて迫り來る暗涙を押へ、

『おゝ左様か、己が惡かつた、老爺怒るなよ、機嫌を直せ……』

と何氣なく言ひながら、天性潤達の内藏助でございますから、忽ち傍らに在つた紙を展べ、

『老爺にやる好物がある。』

と畫を搔き始めました、風流なるうちに英姿ある若き一人の武士、朱鞘の兩刀を落し挾し股立取つて襦もあらはなるに、編笠目深に戴き凜然と先きに立ば、眼の圓い元氣な奴、これも大刀を腰に打込み、主に劣らぬ氣勢で引添ふた主從二人の畫でありまし

た。此の繪の段々と描けるに從つて八助はホウ〳〵と言ながら歡喜の情面に溢れた。

晝中の主人は當年の若殿內藏助、家來は卽ち八助でございまして、其の昔內藏助がまだ部屋住の頃、父と共に江戸にあつた時に吉原へ忍び遊びの狀であるから、八助は堪らなくなつて、

『旦那樣、あの時のお姿はこの繪に些とも變りませぬ……は、ア、老爺も左樣ぢや、斯うしてお供いたして參りました、夫れを思へば今の意氣地なさが腹立しうございますわい、ハ、ハ、、、、。』

と笑ひ仆れるほどに聲を放ちます。內藏助も莞爾として、

『老爺、そちも吉原通ひの夢心、今に覺えがあらうのう。』

と大口あいて呵々〳〵と笑へば、八助はます〳〵悅に入つて膝手出て、

『はい、存じて居ります、全く夢でございまするぢや、ハ、ハ、、、、。』

『そちも私と斯うして土手八丁を通つた事があるぢや……是れならそちへの遺物に何うぢやの……』

『はい〳〵、是れは旦那樣有がたう存じまする、これに上越す遺物はございません、はい〳〵、八助奴が生涯の寶物でございまする、ハ、、ハ、、、。』

三五　拾翠庵中の劃策

漸く泰平に馴れて世は驕奢に流れ、花咲く春の朝、月澄む秋の夕、花に戲れ月に憧れて華奢風流を喜ぶ元祿の頃でも、元和偃武からはまだ八十餘年にしか成らない、であるから國家の治亂興亡に心を注き武を研き、風吹かば吹け雨降らば降れ、機會の乘ずるあれば身を立て家を興さんと窃に野心を抱く者も、チラ〳〵と見えまするので幕府でも油斷をしません、諸侯でも心ある家々では良臣を抱へんと探して居ります時節、

内藏助は赤穗を退出して後は、京の山科に隱れて悠々自適いたしまする、其の胸中には如何なる深謀遠慮があつても、そんな事は色にも現すやうな小人物でないから、俗人の目には只だの浪人者とのみ見るも多かつたらしい。けれども内藏助が赤穗城明渡しの手際には實に上下を敬服させてゐる、飽までも恭謙公儀の命令に背かず、柔順にして謹愼を表する裏に、主家の再興を心掛る懸引きの巧妙なのには驚嘆されて居りましたから、内藏助を家臣に抱へやうと手を廻した大名も少くないでした。先づ第一番に瀨歩みに來たのが隣藩龍野の城主脇坂侯でございまして、之れは當分お客分として百人扶持を出すから來る氣は無いかと、人橋かけて早くも自家の藥籠に收めやうとされます。肥前の鍋島家、肥後の細川家、筑後久留米の有馬家、土佐の山内家、備前の池田家などから、それ〳〵に傳手を求めて内藏助の隱れ家に種々の人が入り込み、何うか私方へお越しを願ひたいと言入るもありますれば、遠廻しに商人や舊の赤穗の出入用達などを態々手懷けて、内藏助を抱へやうとする向きもあり、其の間を縫ふて吉良家上杉家の廻者も、或ひは旅商人を裝ひ或ひは諸家の侍の如く裝ひまして、心底を探らうとするものもございますので、内藏助は一々こんな連中に對して應接するも面倒でもあり、且つそんな人々の出入は大志を抱く身に、ます〳〵警戒を加へねば成らぬことでございますから、最早浮世に望みを絶ち、世間に立て繁雜な身とは成らぬぞといふ擧動を知らして、蒼蠅手數を幾分でも省かうと決心いたしました。

浮世の望みを絶つたと見せ掛けるには、山科を墳墓の地としてドツカリ腰を据るやうにせねば成らぬ、夫れにはと屋敷を買ひ、田地を求め、京都から態々大工を雇ひ左官を招きて隱居所の新築をドシ〳〵遣る、庭園には牡丹を培養する、また妻子を迎へ等もして、内藏助は普請の指圖やら、庭園の設計やらで殆ど他念なく、平々凡々たる有福な浪人、地主の隱居樣と云ふ態度で暮らして居ります。

一方には斯うして世間の目を晦ませ、胸の裏には大望を藏めて間者を欺かんとして居ましたが、内藏助が山科に引移りましてから、山科には進藤源四郎が來る、京都には小野寺十内と忰の幸右衞門、大高源吾の父子叔德も棲みますれば、間瀬久太夫同く孫九郎、潮田又之丞、中村勘助、大石孫四郎、大石瀨左衞門、寺井玄溪、同く玄道が居を構へてゐる、伏見には小山源五左衞門、膳所に岡野金右衞門と息子の九十郎が住む、大坂には原惣右衞門を始めとし矢頭長助と息子の右衞門七が借家するなど、或ひは獨身でゐるものもございますれば、家族と共に同棲するものもあつて、其の他にも追々山科を中心として幾多の同士は、この近邊に集合するやうに成つて參りましたが、扨て斯う成つて來ると内藏助の敵を計る謀略も尋常な手段では、容易に油斷させる事が出來なくなります。

況んや、此の人々が往來して會合する時は、いくら目立ぬやうにするからと云つて、人目に觸れないやうには出來ません、夫れには丁度適當な好場所があると思ひ出しました。

紫野の大德寺と云へば一休和向で名高いお寺であるが、此寺の末寺で瑞光院といふので洛北天神厨司の地にございまして、其の寺に接して古い稻荷樣があつて、世にこれを淺野稻荷樣と稱して居りました、昔は朝野と書いたもので、朝野宿禰といふ人が清和天皇の御胞衣を埋めた處であつたを、淺野家の祖彈正少弼長政が此處に邸宅を構へ、この稻荷を鎭守として祀つたものと言傳へられて居ります。處で、豐臣家の沒落と共に淺野家の邸が荒廢して、狐狸の巢窟と變り此邊は野原になつて居たが、慶長の年中大德寺の琢甫といふ坊さん、物好にも野原へ庵室を建たのが瑞光院の最初で、二代の院主となつた陽甫は、内匠頭の奥方瑤泉院の所緣ある人でございましたから、淺野家より百石の寺領を寄附せられてゐました、當時は陽甫も去つて三代目の院主で

海首座と申す坊さん、淺野家と瑞光院とはこんな關係もあるので内藏助は院主と心易い、その上この邊は樹木鬱蒼として四隣に人家とては無く、稲荷様に參詣する者なども全く絶え、寂しいところでありますから、同志の會合などには至極好い場所だ。

内藏助は一日瑞光院へ遣つて參り、院主と四方八方の話の後、

『御院主、御本院と淺野家とは盡ぬ因縁もございれば、亡君の御墓標を建て、この近くに罷りある人々の參拜を便に仕度と存じまするが……』

と云ひ出しますると、院主は膝を乘り出し、

『それも御氣特の御事、愚衲よりお願ひ申しても建立して頂きたい處で……』

と大層喜びましたので早速にそれと極つて、續いて内藏助の京都に出づる時は、院内の一若拾翠庵を借りることに約束も出來ましたから、以來内藏助が京都へ出てゐるには瑞光院は僑居したのです。

此處に一基を建てまするには、只だ漠然と石碑をヌーと建てたとて仕方がありませんので、何を埋めたら宜らうと種々内藏助は工夫いたしましたが、自分が拜領したものゝ中では亡君の御上下がある、これが一番宜らうと云ふので、淺野家の定紋の附た上下を埋めて、冷光院殿吹毛玄利大居士の法號を彫りつけた一基を建てました。七月の新盆には計畫が後れた爲めに間に合なかつたので、翌八月の十四日までにはと工事を急がせ、十三日までに漸く出來いたしましたから、翌十四日の亡主の忌日に此處で法會を執行はれた。

それより以後毎月十四日に法會を行ひまして、同志の面々は洛北の瑞光院に集つて參拜を致して居ります、此處は前にも申した通り見渡す限りの廣野で、人家と云ふものは四邊にありません、お負にこの寺院は樹木の茂つた中にありますから、同志の密會して凝議するは屈竟の場所でございます、内藏助が此處に亡主の墳墓を興しました

は、一は永代の祀を仕度といふ考へもありましたから、二には此の近所にある同志の參拜の場所に備へやうとも考へましたらうが、永代のお祀や同志の參拜と申すよりは密會の場所として、法會に事寄せ亡君の靈前に於いて議を凝し、高家の筆頭と威を振ひつゝ大名の後援あるも恐れず、天下に一大震動を與へる計劃を旋らすためでございました。

三六　三島宿の詑證文

野も山も樹々に秋の錦を飾つて、稲穂の波の風に騷ぐ頃となりました、江戸に在るところの同志の面々は、日夜復讐の念に驅られて京都連の優柔不斷の齒掻く思ひますも、亦た無理ならぬ事でございませう、主家の兇變後追々と月日は經ちまするに、何時復讐を實行するといふ當もなく、空しく遺恨を抑へ居るばかりでありません、對手方の吉良家には何のお咎めも無くして繁昌する、風説には上野介の公儀に對する首尾、昨日に變らずます〳〵欵待され、又も今に出仕して横柄面をするならんとさへ申しますので、堀部安兵衛を中心として忠義一徹の有志は、最う我慢をして便々と機會を待つことが出來ません、數々内藏助に出府を迫つてまゐり、何うしても因循、出府相成り難くば、江戸に罷在る同志のみにて決行すると云ふ過激な催促狀が來る、此の上捨て〻置かば前後も構ず、憤りに任せて如何なる椿事を引起さうも知れぬ形勢でございますから、老人共よりも萬一の輕擧を氣遣つて急使が山科へ馳せ登つて參りました。

内藏助も大に心を痛め、是れは一大事である、今爆發させては虻蜂取らずに了るのであるから、然るべき人を下して鎭撫させないと意外の妨げとなるが、扨て誰が宜からうかと種々人選しますと、丁度原惣右衛門が手近の大阪にゐるは幸ひ、彼れならば江戸の逸男を鎭める事が出來やうと、急に惣右衛門を招きまして、

『イヤ惣右衞殿、江戸の連中が大分騒々しいやうで、度々飛脚到來するぢや、士氣の振ふは喜ぶべきでおぢやるが、今無謀に事を擧げられたら、一同が苦心致す儀も水泡になつて、折角亡君に對して臣子の本分を全ふせんと心掛ける各自の御志も、空しくならうも知れぬぢや、御身まことに御苦勞でおぢやるが、江戸表へ馳下だつて篤と宥めて下されまいか、此の任に當るものは御身か吉田氏より外に適當の人がおぢやらぬでのう。』

『江戸表の意氣は手前共にも文通がおぢやつた、成程何の手配、心備へも無うて事を發しては危なうおぢやるわ、我れ等の手際に參らうならば、何も御奉公ぢや、直ぐこの儘馳せ下るでおぢやらうが、堀部氏などと來ては中々手剛い連中、巧く參れば宜しいがな。』

『惣右衞殿なら何とか參らうよ。』

『この場合、彼れ是れと辭退する時でおぢやるまい、拙者の差添へとして何人か同行いたしたい。』

『それにも及ぶまいが、お望みとあらば潮田、中村の兩人を御同行下されたい。』

と潮田又之丞、中村勘六を差添へとして、原惣右衞門を江戸表へ下向させましたは九月の中旬でございました。

其の後にも亦た飛脚が急を傳へ參るので、内藏助はます〳〵安心出來ません、其の頃は同志の一人として尊敬されて居る進藤源四郎は、自分の親族ではあり家柄も相應の格式がある者でしたから、又これに大高源吾を差加へ、翌月早々江戸表へ馳せ下らせました。

大高源吾は俳號を子葉といつて文雅の嗜みがある上、忠義一徹の好丈夫でございましたが、此度内藏助から江戸下向を命ぜられ、進藤源四郎と共に東海道を下つてきたり

ます、源四郎は風流氣もない男ですから、スタ〳〵行く跡に英雄の胸中閑日月ありとでも申しませうか、源吾は好きな道とて景色の好い處へ來ると足を留めて之れを稱しつゝ、此の日も三島驛に掛りました、源四郎は例の通りスタ〳〵と行つて了ふ、源吾は好める道の發句を考へながら、夫れに氣を取られて生憎本陣の前に止つて居た駄賃馬に突き當りましたから堪らない、馬は吃驚してヒーンと棹立ちに成る機會、着けてゐる荷を振り落して跳ねまはつたので、源吾も驚きながら、

『是れは思はぬ粗相をいたした。』

と詫び居る前に、烈火の如く憤つて立塞がつた馬士、

『ヤイお士、何で荷物を毀しやがつた、元の通りにして返せば可し、然も無きやア此の國藏が承知しねえ。』

と突然喰て掛る無理難題、荷物は只だ馬の背から落たまでで毀れては居ないので、源吾も扨は常々旅人を困しめる曲者、ムラ〳〵としたけれど、大事の前の小事だ、此樣奴と相手になつて爭ふは損だと早くも覺りまして、

『イヤ誠に濟んことであつた、何うか許してくれ……』

と詫びると、此の國藏と云ふ馬士は海道切ての破落漢でございます、此奴に因緣を付けられたら容易な事では濟ぬ厄介者ですから、

『ヤイ〳〵、お士、此荷物は預り物だよ、荷主へ毀しましたで濟むと思ふか大笨棒奴。』

とます〳〵毒付きますに、源吾もほと〳〵困りましたが、三島驛の世古六太夫は淺野家本陣で、源吾も故主内匠頭のお供で一宿した事のある家でございますから、仲裁方を賴みました、本陣でも惡い奴だとは思ひましたが仕方がありません、手代の次郎右衛門が出て國藏を宥めますと、彼れはセヽラ笑ひながら、

『それぢやア一札詫證文を入れてな……へヽン其上でな好いか……』

と傍若無人な挨拶に、人々は源吾が中々承知しまい、何様騒ぎになるかと手に汗を握りましたが、源吾は平氣で、

『それは重疊ぢや……さらば……』

と矢立の筆を啣へて墨を含め、

詫入申一札之事

我等今度下向候處、其方に對し不束之筋有レ之、馬附之荷物傷所出來申候に付、逸々談事之旨尤之次第、大に及二迷惑一申候、依て御本陣衆を以て詫入酒代差出申候、仇而一札如レ件

元祿十四年巳九月

國藏どの

大高源吾

斯く認めまして之れに金二分を添へ國藏に遣はし、

『これは思はぬ御迷惑を相掛け申して氣の毒に存じ申す。』

と慇懃に會釋して悠然と立ち去りましたには、人々その寛仁大度に驚き、年はまだお若いが天晴の器量人だと、何れも其の姿を見送つて居りました。流石破落漢の國藏もその洒々磊々小事に無頓着なのに驚いたか、

『彼の士は馬鹿か悧悋か解らねえや……フヽン已らア酒代さえ取れば、こんな反古紙の詫證文なんか要らねえ、番頭さんお前に預て置かう。』

と一札を次郎右衛門の前に投り出し、

『さア、今日もまた甘い酒に有りつかれたぞ、へヽヽヽヽ。』

と獨言して國藏も馬の鼻綱を曳きつゝ行つて了ひました。處でこの詫證文が講談や浪花節では神崎與五郎に成つてゐるが、何うも神崎ではなく大高源吾の方が事實のやうであるから、是では源吾として申し上げて置きます。

三七　内藏助の尙早論

江戸表の鎭撫方として原惣右衞門、潮田又之丞、中村勘助を一番手、進藤源四郎、大高源吾を二番手として下向させましたが、原潮田の意見も急進の主張でありますから、事の行掛りより何時突發しないとも限らない、流石機に臨み變に應じて綽々の餘裕ある大石内藏助も、案じ出すと何となく心配になつて、江戸より飛脚の來る毎に其の消息を氣遣つて居りますので、兎に角一度江戸へ下つて自ら鎭撫するが宜らうと意は決した。

それに赤穗開城の當時、城受取の御目附荒木十左衞門等に向つて主家再興の嘆願をいたしたを、何れも内藏助の心情に深い同情を寄せ、其の言語動作に感動されて、殊に荒木十左衞門の如きは歸府の後、御老中方をその邸に訪ひ、内藏助の哀願の次第を述べられたので、老中の中には大いに同情を表された向もあるからとて、態々使者を立てゝ伏見の大塚屋小右衞門方まで書面で送られました事もある、この大塚屋と云ふは淺野家の參勤交代の時、此處に宿泊された本陣で淺野家の贔負を受けた家でありますから、御家凶變の後も内藏助その他へ來る書狀などは大概この大塚屋が取扱つてゐるので、御目附荒木十左衞門より來た書狀も此處へ托されたのであります。

當時の御目附といへば重い役で、中々陪臣などに直々書狀を寄せられるものでありませんし、この御目附から今の天竺浪人の内藏助へ特使を立てらるゝと云ふは、前後に殆ど無い異例で、是れに依て見ても如何に内藏助が重んぜられて居たのか察せられ、其の人格その器量の超凡なことが知れるではありませんか。でありますから内藏助の胸中では此の特使に對し其の儘で置くも禮でない、是非答禮をしなければならぬ、又亡君のお墓にも參詣したい、瑤泉院様の御機嫌も伺ひたい、猶ほ有力な御役向の人々

や浅野家に由縁ある方々に縋つて、お家再興の助力をと哀願したい、今一つは自分は何處までもお家再興にのみ心を碎きて他念なき事を知らせたい、尤も深く吉良上杉の兩家に他念なき事を知らせて、油斷をさせなければ一朝事を擧げるに不便であると、其の一擧一動にも種々の關係やら希望やらを考へました、いよ〳〵東下に決心し、十月の二十日奥野將監、河村傳兵衞、岡本次郎左衞門等と共に京都を出發し、十一月二日に江戸へ着いたしました。

内藏助の出府に就て吉良家は警戒を嚴重にする、上杉家よりも附人を增して用心をすると云ふ始末でありましたが、内藏助の擧動は誠に公なるもので泉岳寺へ參詣したり、瑤泉院の許へ御機嫌伺ひに出たり、又は御目附荒木十左衞門の邸を訪ふやら、淺野家の本家松平安藝守の邸に出る、淺野美濃守、淺野左兵衞などの一族を歷訪して、只管主家再興の盡力を賴むばかりで、何等の活動をする模樣も見えません、江戸に在る同志の面々は内藏助の出府を幸ひに、雌伏して鬱勃たる鋭氣を抑へて居る處ですから、此處で活躍雄飛、日頃の望みを達せんと急立ちましたが、内藏助の案外な擧動に憤りを發し、殊に急進派の先鋒たる堀部安兵衞の如きは、大夫に直談判を試て埒を明けると敦圉あらるゝなど、閃めき出した鋒鋩は暗夜に光を放たんとする、是に於いて十一月の十日内藏助の旅館へ同志の集會を催すことになりました。

この日會合したは奥野將監、河村傳兵衞、新藤源四郎、原惣右衞門、岡本次郎左衞門、潮田又之丞、中村勘助、大高源吾、武林唯七、勝田新左衞門、中村清右衞門、堀部安兵衞、奥田孫太夫、高田郡兵衞などでございます。中にも壯年氣鋭の堀部安兵衞は討入の何時とも分らずぐづ〳〵と延びるに氣を焦ち、今日こそ是が非でも討入の日を極めねば置かぬと勢ひ鋭く、いの一番に口を切り、

「エ、、先般來原氏進藤氏を始め方々の御下向により、段々と御相談も致しまするが、

御相談一向に纏りが付き申さずして、一擧の追々と延引いたしまするは心外千萬でおぢやりまするぢや、大夫の思召しの程は如何あらうか存じ申さぬが、畢竟期限を定めませんからの手落でおぢやりませう、今日は是非ともこの期限をお定め下され度いものでおぢやる。』

と云つて内藏助を睥睨つけた、その勢ひの鋭さ、一座手に汗を握つて控へました、斯くても内藏助は平然として少しも騷ぐ色もなく、落着たロ調で、

『各方の御忠志は誠に感心いたしておぢやる……が、敵を討つと云ふに時期を定めるにも及び申すまいぢや、機會だに得たらば何時にても發するに躊躇せぬが宜しからうよ。』

『然らば此儘便々だらりと……』

と安兵衛は臂を怒らして膝行出ました。内藏助はます〳〵泰然自若、

『イヤ左樣に仰せられては、曲が無くなるぢや、機會を得るまでは辛抱が肝要でおぢやる。』

『機會〳〵と申すうちに、日は經ち申すぢやが……』

『まアお聞きあれ、今日にては大學殿の御處分も未だ決し申さぬ、それに焦つて一擧に出で申したらば、假令思ふ如く復讐は仕遂げるまでが、主家の後事を顧みぬ事に相成るではおぢやらぬか、人臣の分として、それで宜しと勝手な事は相成るまいと存ずるで、旁々期限を定めるは無用でおぢやらうよ。』

と云つて内藏助は慰諭する如く、安兵衛の舌鋒を輕く受け流しまする、此方は更に臆する體もなく

『御言葉ではおぢやりまするが、我れ等は明春三月が適當の時期と存じ申するぢや、大夫の思召は如何におぢやりまする。』

と言つた、内藏助は只だ

「ふむ！」

と首肯きますると、安兵衛は語を繼ぎ

「我れ等が明春三月と申すは、それまでには大學殿の御閉門も免ぜられ、御處分も付くでおぢやりませう、其の上、三月は御一週期でもおぢやれば、此の期に於いて先君の御鬱憤を散ぜんことは我れ等の本意で、大夫に於かせられても御異議もおぢやるまいかと存じ申すぢや。」

と内藏助の顏を見ると、莞爾して輕く首肯いて居りまする。

「それに未だ一つは、期限がおぢやらねば士氣が引立ち申さぬ、動ともすれば姑息に陷りまするぢや、夫れや是れやから致しても三月を期したうおぢやるが……」

と意氣いよ〳〵昂つて辯じ立てました。内藏助はこれを聽き安兵衛の意見にも理窟はある、時期としては早いと思ひましたが、折角同志の熱中する望みを挫くは得策でないと、

「三月期限も好からう！」

と輕く同意しましたので、安兵衛を始め同志の面々は滿足して會議を了ります。扨て斯う極る上は當地に永居しては事の破れる基となりますから、内藏助は進藤源四郎、潮田又之丞、中村勘助、中村清右衛門を引連れて、十一月廿三日に江戸を立ち山科に歸り着きました。

三八　三人鼎座の憤慨

討入は明年の三月と内藏助も同意を表しましたから、江戸にある堀部彌兵衛老人、養子の安兵衛、奥田孫太夫その息貞右衛門、武林唯七、大高源吾、原惣右衛門等は頻

りに討入の準備やら敵情視察やらに憂き身を窶して居りました。

處で吉良家の方は何うであるかと晝夜油斷なく探つて見ると、東北の大大名上杉家の後援があるので、殿中の首尾至極でございまして、淺野家の城地沒收跡目斷絶といふ隨分思ひ切つた仕置のあつたのに、上野介はお咎めとてもなく、上杉彈正大弼から上野介負傷後兎角病氣勝に候へばお役儀御免を願ひたいと申し出で、三月廿六日職を免ぜられました儘、呉服橋内の邸に暢氣に住まつて居ましたが、何うも評判が宜しくない、淺野家に對する同情はますく加はつて來る、中には幕府が片手落の捌きと蔭口さへチラくする處から、上杉家の鼻息ばかり窺つても居られないからと、九月二日に本所に邸替をさせられました、扨て斯う成つて參りますと愈々臆病風は烈しく、風聲鶴唳で鼠がガタリと云してもビクリとする、門内に商人が入つても大騒ぎをする始末ですから、警戒は最も嚴重で、若黨草履取は勿論のこと、下女下男の末まで身元を詮鑿に念を入れ、皆參州吉良の領地内から採用する程でございました。

そんな風であるので、胡亂な者でも門内を窺き込ふものなら、夫れこそ門番は目を皿のやうにして監視もする、又門内へ一歩でも踏み込せるものでありません、斯うまでしますが未だ安心なりませんか、上杉家から藩士を交代に入込せて護衛に注意を致しますが、何うも枕を高く眠ることは出來ないので、上野介に隱居をさせやうと公儀へ願ひ出してありましたが、十二月十二日に願ひ通り聽き屆けられ、跡目相續を養子左兵衛佐義周に仰付けられ、所領四千二百石は元の如く下される事になりまして、當にそればかりで有りません、上野介隱居となる上は必ず邸内に住まなくとも宜いので、明春に至り溫暖の季候に爲つたら、上杉家の領地米澤へ移し、老後を無事に送らせんとの計畫もある由、人の噂に登りました。

之れを聞いた江戸にゐる同志は、這は容易ならぬ風説である、萬に一つも然ること

のあつては一大事、米澤へ逃出さぬ前に遺恨重なる白髮首を手に入れねばならぬと、安兵衞は矢も楯も堪らなく成つて原惣右衞門の所へ飛んで來る。

『惣右衞殿、家にか……』

『これは堀部氏！』

『家にか……一大事……』

と言かけ、フツト氣が注きて口を抑へ、

『イヤ好日和、師走の小六月ぢやのう。』

『先づこれへ……』

と惣右衞門の云ふうち、安兵衞は例の朱鞘の大刀を腰から拔きて片手に攫げ、ドツカリ坐して四邊をキヨロ〳〵見廻しまして、惣右衞門は低聲になつて、

『聞きやつたか、彼の一件を……』

『おうさ！』

『拙者も今出懸やうと存じた處、丁度好い處であつた。』

と二人はまだ何事も話さないうち、表に人の足音、シツ〳〵と互に警しめ油斷せぬ體であつた、表の人はエヘンと咳拂ひをして、

『惣右衞殿家ぢやな。』

とヌツト入つて來たは大高源吾でございますから、二人は莞爾しまして、

『お噂も聞きやつたな！』

『おいのう、今堀部氏の處へ參れば留在、てつきりと付けた見込みは外れぬわい。』

是れより三人は火鉢を圍み、茶を啜りながら密議を凝し、

『隱居しをつたは隱れ無いことぢや、左兵衞奴にぬけ〳〵舊高を下されるとは……之れと云ふも上杉の暴威を以て、筋目〳〵へ渡る効驗ぢや。』

と源吾は憤慨致しまするとと、安兵衛は左も悔しさうに火箸を捻り詰めて、
『米澤へ逃げ込せては、二十人や三十人の同志で斬り込んだとて、先づ望みは遂げられまいから、途中に要撃して首尾よく素懐を達せねばなるまいッて！』
『萬己むを得なければ、途中要撃より仕方はあるまいが、成るべく出發せぬうちに事を擧げて討ち取らねば成らぬ、途中の要撃は易きやうではあるが、敵にも必ずそれだけの備へもあらう、老獪な狸老爺であるからの、どんな影武者を使つて安全を圖るかも知れ申さんぢや。』
と原惣右衛門は言ひますと、源吾は、
『如何にも左様ぢや、彼の様な奴はどんな卑怯末練な振舞をせぬとも限り申さん、之れは一日も早く討入るに若くことはおぢやらぬ。』
『左様、機會を見て直ぐにも仕掛る準備をせねば成り申すまい。』

と安兵衛も言つたが、また暫くして、
『彼奴も老年ではあるし、今隱居したばかりで直ぐ米澤くんだりへ引込みもしまい、春暖の候になつて上杉家に引取られるといふ風説は、何うやら眞實らしく思はれておぢやるが、御兩所の御意見は如何でおぢやるな。』
『堀部氏の説の如く、春暖に參ると申すが確のやうでおぢやる、拙者の聞いてまゐつたも左様でな……』
と惣右衛門が云ば、源吾は
『拙者は左様承つて參つた、此の上は先達て決議いたした如く、是非三月に決行いたさうではおぢやらぬか……』
『御同感でおぢやる、堀部氏の御意見も大差はござるまいな。』
『御意の通りでおぢやる。』

三人は來年三月にいよ〳〵決議しました、處で、他の同志も追々この事を聞き込み、米澤へ引取られると云ふことが、一同の心に警鐘を打込れて一時に火の燃上るごとく熱度は急に昇騰しました。

斯うなつて參ると、原惣右衞門でも堀部安兵衞でも同志を抑へ切れませんから、極月廿五日に江戸を出發したは原惣右衞門と大高源吾の兩人で、翌る元祿十五年正月の九日に京都に着きまして、風説によれば上野介は上杉の本國米澤へ引取られ行くさうであると、唇から外へ出る京阪に散在する同志は一時に興り、思ひ〳〵に山科へ忍び行くもございますれば、惣右衞門の處へ來て復讐の快擧を迫るものもあります。

また江戸表からは急飛脚到來して、士氣ます〳〵勃興し、養父彌兵衞老人の如きも、花咲くころまでは待たれずと申し居るなど、安兵衞の文面にもあつて形勢甚だ不穩に成つて參りました。

三九　累卵の如き形勢

江戸表の面々は目前に讐敵の邸を睨み、隙あらばと窺ひ居ります矢先、其の敵が上杉家に引取られて米澤へ落ちると聞きましては、氣の揉めるも道理で、白泡含んで馳せ出さうとする悍馬が手綱を引き締められ、無理に足掻きをしつゝ止つて居るのだから堪りません、思ひは遠く離れてゐても同じ鐵石心の人々、江戸の動靜を聞いては是れを猶豫する時でないと焦る、其の中に急進派である原惣右衞門大高源吾は、最早片時も猶豫は成り申すまいと、大石内藏助に迫つて參りますので、流石の内藏助も持て扱つて居ります。

扨て内藏助の胸中はと申せば、無論復讐もしたいには相違ないのであるが、主家の再興と云ふ事に最も重きを置いて居りますから、乘り掛つた船である騎虎の勢ひであ

る、遣付けろと云ふやうな輕躁の態度を採ることは出來ません、何處までも愼重の態度を取つて安全な方針に出なければ成らないが、枯柴に火を點けたやうにパツト燃あがつた氣勢を、此の儘にして置いたなら輕擧に事を發して、取り返しのつかぬ失敗を招かないとも云れませんから、深く考へ遠く慮かつて、是れは同志の中より威嚴と德望とを兼備へた大人物を、再び江戸へ下して抑制しなければ、到底も鎭撫は困難であるが、此の大任に當るものは特り吉田忠左衞門あるのみだ。アヽ忠左衞門、忠左衞門、彼れならば確に江戸の同志を歸服させ鎭撫が出來ると、その意を決すると直ぐサラサラ手紙を認めまして、彼の播州に參つてゐた吉田忠左衞門を招き寄せました。

此方は內藏助よりの急使でございますから、手紙を見ると直ぐ馳せ參つた。

『至急の御相談とは何事でおぢやるな、江戸表に異變でも……』

『イヤ、左ほどの儀でもおぢやらぬが、其許に下向してお貰ひ申さねば成らぬ事が起つたで……』

『はア。』

『例のが米澤へ逃げ込むと申すので壯者共大分喧しうおぢやる、昨日還つて參つた惣右衞や源吾なども、舊冬拙者が江戸表にての生挨拶を決行いたせと迫るぢや、若し膳を嚥む悔あつては詮ない事、それで其許を煩はし江戸の鎭撫方をばお賴み申したうおぢやる。』

と內藏助が申しますと、忠左衞門は一黨の副統領と崇められる器量人でございます、分別識見共に衆を壓する偉人ですから、暫く默考して居ましたが、

『大夫に於いて、我等が下向すれば一味の掛引きに都合好しと思召すならば、忠左衞門さらに其の勞は厭ひ申さぬ。』

『それ聞いて安心いたしておぢやる、何うか下向して下されい』

『參ることは只今も申す通りさら〳〵厭ひ申さぬが、參るには參るやうに致さねば、忠左衛門人形の使でもおぢやるまいからのう。』

『ふむ、御意見があらば承はつて……』

『イヤ意見も何もおぢやらぬが、拙者の參るには其の以前同志の議論を一致させ、上方の決心は箇様々々でおぢやると示さでは、江戸の衆とて納得は參り申すまいぢや。何うか同盟の衆を此處に集め、目のあたり互に約束したる後に發足したいものでおぢやるが……』

と建議しました、内藏助も横手を拍ち、

『御意見至極でおぢやる。』

此處に於いて四方に散在する同志に通知いたしまして、之れを京都に招致して大會合をすることに成りました。

此の時緣側傳ひに態と足音高くさせて參るものがございましたので、内藏助は言葉をかけ、

『其所へまゐつたは誰れである！』

『はい、松之助でおぢやりまする。』

『何か……』

『只今、原大高の兩氏參られましたでおぢやりまする、御來客の由御斷り申し上げましたが、御用談のお濟みに相成るまで差控へ居れば、是非父上へお取次いたしてくれとの御言葉、如何取計ひませうや。』

『おゝ、兩氏が見えたか。』

と言ひながら、忠左衛門に向ひまして、

『丁度幸ひの處でおぢやるのう、此處へ通して、會合の事を申し聞かしたならば、嘸

ぞ滿足におぢやらう。』

『如何にも左様でおぢやらう。』

と忠左衞門も挨拶しましたので、内藏助は縁の方を向き、

『兩氏とも苦しうない、此方へ御通し申して宜からう。』

『はい、畏まりました。』

と松之助は引返すと間なく、案内に伴れて原惣右衞門、大高源吾の兩人は縁側傳ひに遣つて參る。

『これは吉田氏でおぢやりましたか……』

と兩人は會釋をする、主客四人席定まりますると、惣右衞門は口を開き、

『度々お迫り申して、御立腹の程も如何あらんとは存じまするが、何とか御挨拶を承ちねば、江戸表へ申し遣はす言葉もおぢやりませぬので……』

と語氣は誠に沈着て居ますが、其の熱烈は鐵をも鑠すべく、石をも燒焦すべき意氣がございました、傍にゐた忠左衞門は、

『御兩士とも段々の御心入、大夫に取りても如何ばかりかお喜びでおぢやらう、拙者ども〻其の擧動を拜見しては勇ましくおぢやりまする。』

『イヤ、恐れ入つたる御挨拶甚だ痛み入りまするが、何分にも江戸表の危急打捨おかれませぬで……』

『御尤に存じ申す、只今もその事でな、大夫からの御相談もありましておぢやるが、此の上は一同會合してお互に意見を述べ、決議を致すが宜らうと存じ、御苦勞ながら各位にも御寄合下さるやうに致さうと、大夫から同狀をお出しに成る處でおぢやる、御兩士の御意見は何うぢやな。』

と云はれましたが、惣右衞門とても源吾とても素より望む處でございますから、丁度

開た口へ牡丹餅を投り込まれたやうなもので、少しく張合脫けのした氣味で

『左樣に相成れば、此上もない事でおぢやりまする。』

と惣右衞門が云へば、源吾も同じく

『拙者とても滿足に存じまする。』

『然らば、原氏は大坂の同志へ御通知を願ひまする。』

『畏まりましておぢやる。』

『大高氏は京都の同志へ……』

『承知いたしておぢやる。』

これにて通知の役割も極つて、いよ〳〵二月十五日に會合する事に決しました。

四〇　山科會議の難關

二月十五日は來た、會議は開かれましたが、議論百出で容易には決しません、それに一ケ所に場所を極めて、毎日寄合ては目に立つし、敵から何樣間者が窺ふも知れませんから、會場は始終場所を變ては寄合ひ、數日に渡つて、最後に開かれたのが山科でございます。

當時は同盟の士も多くあつて、內藏助と肩を並べて家老風を吹かせてゐた奧野將監なども、まだ馬脚を現さずして忠義の假面を被つて居ました程で、幸ひに主家の再興する場合には、强がつて居ないと幅が利かぬと云ふ、自分本意の同盟者もある、で、一樞に同盟者と申しても大別すると三派になつて居ました、卽ち主家再興と復讐とを共に心懸る一派、これは大石內藏助を盟主として、それに隨從する溫和派であります、主家再興をのみ希望する一派、內藏助の大量と智慮に服して、再興は十中の八九まで確信する、他人の褌で相撲を取らうとする愛身派であります、今一派は復讐一點張で何

でも殿様の鬱憤をお晴らし申し上げんと焦る急進派であります。

同じ同志であつても此様に的を異にして居りますから、是れを打つて一團にする事は中々困難な仕事、團子を手の平でくる〳〵と丸めるのと大分調子が違ひませう、そこで一致した決議を纒めやうとするは、容易な譯でありませんので、會合は二度が三度、三度が四度と度數を重ね、最後の會議として山科に寄合ふことに成りました。

最うこれが打ち止めの會議である、同盟の破裂するも團結して事を擧ぐるも、たゞ今日が關ケ原でございますから、重なる同志の面々は悉とく列席し、殺氣は陰々として滿場に溢れて居りまする、溫和派の面々は首領内藏助の發言を待ち、片唾を呑んで控へますれば、愛身派の者は因循姑息を守つて、啞の如く沈默しつゝ天下の形勢如何と筒井順慶流を極める、其の間にあつて奮激突貫の勇氣を示し意氣天を衝く概あり、今にも此の一群より碫々たる爆音を發して舌戰の火蓋を切らんとして睨み合は急進派でございましたが、内藏助は場中を見廻すばかり、更に發言をしませんので、急進派の一角より堪りかねまして、膝行出た一人、

『大夫殿、斯く幾度寄合申したとて、何時も〳〵小田原評議では埒明き申さうやうはおぢやらぬ、未だ御決心なきは如何なる御存意でおぢやる！』

と内藏助へ向つて肉薄いたしますると、又一人は肩を張り力瘤入れた兩手を膝におき、

『いやさ、先頃の江戸會議までは、敵に何等の異變もおぢやらなかつたに、大夫殿には其の時すら三月期限に御同意なされたでおぢやらう、今は中々左様の手溫き手段で滿足する場合でおぢやりませぬぞ、敵は最う隱居しましたぞ、米澤へさへ引取られやうと云ふ噂もおぢやるぞ、安閑と日を送るべき時ではおぢやらぬ、御趣意のある處を詳しく承はり申したうおぢやる！』

と云へば急進派の面々は皆期せずして乘り出して參りました、溫和派の人々は内藏助

が何と答へるであらうかと互に固くなる、日和見の愛身派は巧く切拔けて貫ひたいと、事勿れ主義でビク〳〵として居る始末で、一座は水を打つたやうに寂とし、雲雨來らんとして風先づ落つる光景を呈した中に、泰然自若、悠々として迫らず騷がず、逸りに逸る同志の的に成つて居ます內藏助は、

『御不審は御尤でおぢやるが、拙者は江戸會議の席上に於いても、仔細に述べたる事は方々も御記憶に在らうと存ずるから、改めて申すまでもおぢやらねど、大學樣の御處分も未だ定まらず、幸ひに御咎めも許れ、假令萬石にても跡目仰付けられる儀と相成れば、先君の御面目も相立つ道理、此處の考へもなく、其の成行きも見ない中に、只だ一身をのみ潔ようせんと致すは、決して臣子の本分でおぢやるまい。』

と嚴然と言ひ出せば、まだ何事をか言ひ續けんとするをも待つて居られず、中間に口を挾みまして、

『然らば、大夫殿には、何時と當もなき公儀の御沙汰を御待ち成さる、御所存でおぢやりまするな。』

『如何にも公儀の御沙汰を待つて、然る後動く所存でおぢやる。』

とピツタリと言ひ切りまするや、急進派の面々はます〳〵烈火の如く猛り立ち、目を怒らせ肱を張つて、

『這は怪しからん御言葉を聞くものかな、既に江戸會議にて一旦御承引ありたる約束を反古になさるとは、武士の言葉にも無い二枚舌……』

とハラ〳〵と落涙して詰め寄らんとする硬骨の士もございました、斯くても內藏助は更に驚く態度もなく、

『イヤそのお憤りも然ることでおぢやるが、彼の節は關東衆の忠義のお志しも默し難いので、拙者の所存を申し募り、士氣を沮喪せんも不本意でおぢやれば、暫らく

方便により方々の意に從ふたまでゝおぢやる、今日は未だ時機は到來せぬ、拙者は輕々しく事を擧げ申さぬ！』

と穩かな語氣で述べましたが、人々の胸には强弩を發された程に、深く失望と落膽とに驅られ、急進派は一層の激昂が甚だしく成つてまゐり、

『君の祿を食み、君の恩を受けたる我れ〳〵が御家再興を望まぬものは一人もおぢやりませぬ、併し仰せに從ひ、大學樣に跡目仰せ付られるまで一擧を見合すと致し、望み通りに御家再興にも成り申した上で、多勢黨を結び徒を組みて吉良殿に討入り申さば、それこそ折角御再興に成つた御家も亦た潰し奉る原因とも成り申さん、御言葉は婉曲なれども、御所存の奥は復讐をお止め成さるのでおぢやるな？』

と敦圉かゝつて今にも飛び附かんの勢ひでございます、それでも內藏助は更に動ずる色もなく、

『いや〳〵、左樣ではおぢやらぬ。』

『ぢやと申して、三尺の童子にでも解るごとき討入り、御家再興を御望み成されるから、御家を潰しても復讐を成さると仰せられまするか？』

と語氣は次第〳〵に荒くなつて、急進派の面々は滿面朱を注ぎ詰め寄つて來る、內藏助は頭を振り手にて制しつゝ

『いや、御再興は御再興、復讐は復讐でおぢやる、如何にも御家再興の曉天、多勢徒黨して討入り申すことは相成るまじ、と申して不倶戴天の君の讐を、此の儘安穩に活け置くことは相成り申さぬぢや、其の節はこの內藏助唯だ一人、一黨の方々に代り吉良殿に怨みを報ふ所存でおぢやる。』

と言葉は少しく凄味を帶びて言ひ放ちました、人々は餘りに意外な挨拶に一座白けて言葉を發する者もありませんでした。

四一　急進派の大激論

關西急進派の重鎮である原惣右衞門元辰は、この時まで一語も發せず、大石内藏助の擧動に瞬きもせず凝然視詰め居りましたが、衆に代り只だ一人にて讎に怨みを報う所存と聞きますや、ズル〳〵と進み出で、

『大夫殿、只今の御言葉に相違おぢやりませぬな。』

と凛然として問ひまする、

『御念に及び申さうぞ。』

と内藏助は飽くまでも沈着いた態度である、惣右衞門は悲憤の熱涙を拂ひ、

『然と左樣におぢやるな、さらば申し述べねば相成らぬ、去年三月主家の御凶變以來今日に至るまで、終始一貫約束に違はぬ人々は申すまでもなく、其の後にも段々と馳せ加はられた方々も、其の心は何れも復讎に一致して他念はおぢやらぬ、假令何の樣な難儀起るとも此の志しは天地神明に誓つて變り申さん、然るに大夫の仰せの如くなれば、大夫御一人總名代として本意を遂げられるとの御言葉、我れ〳〵一同は何れも腰拔武士となつて、天下の胡虛と相成らねば成り申さぬ、各方は如何に思召さるゝや存じねど、此の惣右衞門は甚だ殘念至極に存ず、各方の一擧を急がるるも腰拔武士と成りたうおぢやらぬからでおぢやらう、君は赤穗一藩の君でおぢやるぞ、大夫の爲めにも主君でおぢやれば、我れ〳〵一同の爲めにも亦た主君でおぢやる、君父の讎は俱に天を戴かずとは誰も同じ心で、赤穗城中死に損なひの拙者の如きは、今更生き存らへて坊主となる所存はござらんや。』

と語氣は一語一語と鋭くなつて、其の毛蟲の如き眉はピリ〳〵ピリ〳〵と動いて、知らず識らず席を叩いて論じ掛けました。

斯う成つては豫猶する處でない、大高源吾は聲を勵まし、

『原氏の御所存、我れ等も御尤に存ずる、大夫の御意見なれども双に敵の血を塗らねば、この儘思ひ止まることは罷り成り申さぬ。』

と憤慨の狀を露はしますれば、續いて潮田又之丞、中村勘助の一群は、

『我れ〳〵とても、今日まで斯くてあるは何の爲めでおぢやらう、如何なる事のありとて此の儘に已み申さんや、方々の御意見如何でおぢやる。』

と勵聲一番一座を睥睨いたしました、殺氣は今や滿場に漲うて、洪水汎濫して將に大河も決潰せんとする勢ひで、

『御同意！』

と一聲が一隅から發しますると、此處からも彼處からも聲に應じて、

『御同意！　御同意でおぢやる！』

と高く叫び、アハや一黨の分裂とも成らん形勢、容易ならざる光景と成りました。

同志の副頭領とも仰がれ威望衆に抽ずる吉田忠左衛門と、常に大石内藏助の側にあつて參謀の重任を擔ふ小野寺十内は、先刻よりの激論に手を拱き、同志の擧動に注目して油斷をしませんでしたが、忠左衛門は靜かに口を開き、

『方々の仰せ御尤至極でおぢやるが、大夫の申された處は、大夫御一人義士と成られやうとの儀ではおぢやらぬ、畢竟するに方々の忠節も空しくせず、御家の再興にも妨げなきやうにとの御分別から出たお言葉でおぢやれば、一圖に惡くお取りに成つては大夫の御本意に違ひませうぞ。』

と老巧の口調で騷然たる衆を鎭撫する、續いて小野寺十内も、

『各々の思ひ込れたお志しは、誠忠正義の迸しりで、世に有りがたい所でおぢやる、實はと申せば、我々の年寄には好い行きがけの駄賃で、死出の山の一番槍を心掛居

り申したぢや。』

と申します。忠左衛門もまた、

『年寄の我れ等でさへそれぢや、血氣の方々の一途に思ひ込れるも、又一段に感じ入つておぢやる。』

と言ひつゝ、夫れとなく内藏助に再考を促がしました。

内藏助とて素より人々の忠義を犧牲にして、自分一人が臣子の本分を全うして屑よしとするやうな人でない、人々の心の底から割て出る清い誠實の漲りに感じて、兩士の意見に耳を傾け居りましたが、徐ろに

『今に始めぬ事ながら、方々が御誠忠斯くまでにおぢやれば、此の内藏助とても唯だ一人にて讎を討ち取る所存でおぢやり申さん、必ず方々と進退を一にして素懷を遂げるであらう、併し今只も反覆述べた通り、大學様の御成行も見ずして事を擧げることは成り申さぬぢや、來月は御一周忌でもあり、夫れまでには公儀に於いても何分の御沙汰がおぢやりさうなもの、若しもそれが延びるに於いては明年三月の御三回忌までは忍ばねば成り申さん、それまで忍びて尙ほ何の恩命もおぢやらねば、最う勘忍も成り申すまい、主家の御運も拙いこと、諦めるより致し方がおぢやるまい、其の時こそはお互に申し合せた最後の一擧に出で、無二無三に敵の邸内に討入り、首級を揚げて亡君の御鬱憤を晴さん覺悟でおぢやれば、方々も今一堪忍なされて拙者の意をお汲取り下され、同盟一致の進退をお任せられたうおぢやる。』

と誠意を竭して利害得失を說き、肝膽を碎いて時機の尙早を論じ、主家を思ふ眞心を披瀝しましたので、如何で復讎を急ぐ急進派の面々も、其の誠意誠心に動かされ、流石にそれを遮つても自說を徹さうとは主張し難い、内藏助の胸中を察すれば轉た同情に堪ませんので、原惣右衛門は一同に向ひ、

『大夫に於いて結局の一擧をお受合なされる上は、決行の遲速は大夫の御意見に任せて、我れ〳〵は忍んで時機の來るを相待ち申しては如何でおぢやる。』

と相談をかけまする、大高源吾も潮田又之丞などの逸り男も、

『進退一致の御約束下さる上は、是非に及ばぬ御待ち申さう。』

と折れた、其の他の同志も然らば內藏助に一任すると云ふ事になりました。

是れにて決行は今年の三月でなければ來年の三月と略ぼ結着しましたが、此の間にあつて沈默を守り目ばかりキヨロ〳〵させ、急進派の激論に冷汗を流して居たは、彼の愛身派の日和見連中でございませうか、無論この腰拔連は睾丸が上つたり下つたりでしたが、夫よりも尙ほ深く心を痛めましたは、思慮ある老人連中でムいます、論戰いよ〳〵猛烈双方一歩も讓らぬとなれば、勢ひ破裂は免がれないので、萬一破裂の曉天には復讐の望みも、御家再興の嘆願も、滅茶〳〵に成り了りはせぬかと心配しました。何しろ今日の會議は同盟して復讐を擧げんと辛酸苦痛を忍び、艱難悲慘を冒した中の第一の難關で、內藏助の德望と赤誠がなかつたならば、山科會議は無事に解散は出來なかつたでありませう。之れに由つても世に怖しい威勢を有するものはたゞ一の『誠』で、その活動は天下に敵する物が無い、實に山科會議の難關もたゞ一の『誠』の爲に花を留めたのでございます。

四二　細作隱家を窺ふ

吉田忠左衞門から此處許の決心を固めた上ならではと、申し出ました關西同志の意見は山科會議で決したから、此の上は一刻も早く江戸表の鎭撫が必要となる、そこで內藏助は會議が終ると直ぐ、其の席で、

『此方の意見は決し申したからは、關東衆に於いて輕擧事を誤るやうな議がおぢやつ

ては成らぬ、就いては之れも鎭撫して一致の行動を取らねば、折角方々と盟約しても甲斐がおぢやらぬ、然らば吉田氏は御苦勞ながら拙者の名代として江戸へ下向下され、同志の人々にお打合せを願ひたい。』

と言ひ出した、素より下向は承知しての大會議でございますから、忠左衞門は直ちに異議なく、

『委細承引いたしておぢやる。』

と挨拶する、續いて列席の近松勘六に向ひまして、

『近松氏、其許にも御苦勞なれど、吉田氏の介添として下向下されい。』

と申しまする、之れも即座に

『畏まりました。』

と答へ、江戸下向の役割は極りますと、内藏助は再び、

『近ごろ敵方の間者らしき人物もチラ〳〵と見掛け、拙者共の擧動を探るやうにも見受けらるゝので、今後は文書の往復等にも心を用ひねば成り申さん、お互に本名にては便宜惡うおぢやるに因て、以來拙者は池田久右衞門と仰せられい。』

『成程、御言葉のごとく變名の方萬端都合宜しからん、某は篠崎太郎兵衞と致さう、近松氏は何と成さるゝな。』

と忠右衞門が申しますると、近松勘六は深くも考へませんで、

『左樣、森清助などは……』

『森清助、宜しからう。』

と内藏助は申しましたので、三人の變名は極り、兩士は足輕寺坂吉右衞門を從へ、二月廿一日京都を出發して江戸へ向ひました。

それで大阪には是れまで通り原惣右衞門がゐて、赤穗と山科との連絡を取り、江戸

には吉田忠左衞門が在つて關東と山科の氣脈を通じ、内藏助は山科に本營を置いて一統の指揮節度を司り、その參謀としては小野寺十内帷幕の中に謀計を回らしましたから、秩序整然として寸隙の犯すべき所がありません、さうして同志が運動一切の費用は、赤穗開城の當時御家再興費として控除した金から支辨しましたので、御家再興などに何うして其樣大金が要るかと、窃に内藏助の心情を疑つてゐました連中も、是こに至つて始めて其の用意の周到なるに感服し、成程とます〳〵内藏助に歸伏する心に成つたと申します。

今までとても同志の往復は斷ずあるが、斯う判然と秩序的になりますと、何かにつけて用事が頻繁になつて參るもので、同志の出入も勢ひ多く成つて來るから、人々の目に注くやうな事が出來る、内藏助が如何に山科に邸を買ひ、田地を求め、庭園に好きを盡くしたり牡丹を栽ゑて他念なく、只だ一家の計、子孫の爲めに貨殖の道を講ずるやうに見せかけても、先方にも亦た荒神樣が着いて居るから油斷は出來ませぬ。

殊に讎吉良家の後楯、上野介を米澤へ引取るとまで風說ある、上杉家には千坂兵部などと云ふ豪傑がゐて、内藏助が山科に隱れたを疑ひの眼で睨み、京都へ隱密を入り込せてその一擧一動に注意をして居りますので、是れからは一層の用心をせねばなりません、中々に變名位で暢氣に濟して居たら、如何なることから祕密を嗅ぎ出されるか知れぬ、尋常一樣の業では敵の視聽を欺くは難いと、内藏助は胸中に佯狂苦肉の計を描いて居りました。

果せるかな、山科會議のあつて後は怪しい旅人の往來がある、内藏助の邸の地續きに稲荷塚といふのがございまして、是れが此ごろ大分流行します處から、稲荷詣に假托けて妙な人がチラホラ參詣する、内藏助は或る夕方何心なく庭内を散歩して居りますと、生垣の外に下男が草取りをして居る處へ、近所の百姓が來まして高調子に話を

始めました。

『孫作さん、豪う働きなさるのう、此の日の暮れに草取りかいな。』

『おゝ久五郎さんかいな、何處へ往かつしやつたか、一刻見ねえなんだのう。』

『今日は伏見まで往つて參じましたぜ。』

『左樣かいな、今歸りか……』

『左樣ぢや……今日は天氣も好し稻荷塚へは大分參詣があつたらうなア。』

『中々賑しかつたぢや、此の節は侍衆まで折々見えさつしやる樣に成つたのう。』

『おゝ、左樣ぢや、此の間も二人連の侍衆が御參詣成されたぢやが、その侍衆は此方の旦那さんに知己とやらで、今は何うして居られるか、何をして御座らつしやるなんツて、根掘り齒ほり詳しう聞かつしやつたと婆さまが話ぢや。』

『左樣かな、お國の衆であらう。』

『何でも關東の衆に違ひないと婆さまは云ふてゐたがの、訝しいことには、旦那さんの事を聞いたり、お邸は何處だと聞かツしやつたんで、直ぐ其處の大な生垣で結ひ回らしたとこがお邸と敎へるとな、侍衆はそれでは尋ねて參らうと歸られたんで、婆さまも物好に門口に出て見てゐたら、侍衆はこのお邸の前で立ち止つて、御門の內を覗き込み、生垣の間から內裏を覗いて居られたがの、婆さまの門口に立つてゐるに氣が注いたやら、チョコ〳〵走りに行かつしやつたといのう、何うやら胡亂臭い侍ぢやあるまいかと、婆さまも氣味惡がつて居るぢや、用心さつしやれよ。』

『左樣か、能う云ふてくれさつしやつた、此方のお邸は有福ぢやに依つて、惡い奴が附け居るも知れん、用心が第一ぢやのう。』

と言つたに、內藏助は微笑みつゝ、矢張來居つたなと內心に警戒したともございます、また或時は風體怪しな男、西の山村に來て大夫のお邸に浪人らしい者が出入はせぬ

かと尋ねたと態々知らす人もあり、今日も怪しき奴がこの邊を徘徊してお邸を覗き込んだと告げる者もありますので、内藏助は扨ては敵も白徒であるな、是れ式の見せかけでは油斷はせぬと見える、是りや一段と行き方を替へて一泡吹かさねば安心が出來まいと、そろ〳〵遊所場通ひに足を向け、京の島原、祇園町に浮れ出しましたが、浪人とは申せ赤穗の家老であつた人、金に絲目もつけぬ大盡遊びに遊廓の相場を狂はせ、何處やらに凛々しい犯しがたい處は見えるが、然りとて野暮でなく、酒も參れば端唄も歌はれる、酔がまはれば三味線を持ての爪彈きもされる粋なお客、忽ち寛濶な大通人となつて『うき様』と呼ばれました。

四三　佯狂苦計の大盡

京は島原の月に浮世を餘所の放埒、祇園町の花に憂身を忘れた大盡と贅を盡し、四條五條の夕暮は藝子末社を引連れて、人の謗りも何のその、色と酒との兩天秤、世間を憚らぬ振舞に慊りませんで、伏見の里に忍び夜は後朝の鐘をうらみて、撞木町の揭屋に迎ひ酒の流連もする、今日も遊樂に飽きて暮らした、明日は飛鳥は程近き寧樂の木辻で解語花の香に眠り、座敷に咲かす黄金の花の花吹雪に、晝を夜にする長夜の宴と浮れ狂ふた豪遊の、夢路を走る心の駒の勇みから、蘆の花散る難波津の新町までも跳りこみまして、粋も無粋も一撫にうき様よ、うき大盡よと、黄金の香に寄り集る末社藝子のざんざめき、太夫、轉神のそれ者までに粋なお客と囃されて、何時も内藏助の座敷は處々の名花を競ふ花菖蒲で、引きぞ煩ふ取り〴〵の色合せ、何が桃やら櫻やら、さては牡丹に芍藥藤の花、品よく垂れる袂や袖のほら〳〵と、指す手引く手の舞扇、ひらりひら〳〵ひら〳〵と、火影に宿る蝶々は金と銀との一對ひ、うき様の寛濶あそびと何處の遊廓でも、たはけた浮名を流して居りました。

當時の小唄にも謠はれますれば、評判記にも載せられた名高い遊女で、京は島原にて舛屋の夕霧と云ひ、伏見の撞木町では笹屋の浮橋と云つて、相並んで花街の間に名を擅まゝに致し、狹斜の巷に威を振ふたものでしたが、春の朝の花、秋の夕の月に浮れる内藏助は、この名花を手折り現他愛もなく、揚屋の酒に醉眼朦朧として何事も心に懸るものなく、人生百年たゞ行樂にあるのみで居りました。

今日は珍らしく山科の隱家に歸りましたものゝ、宿醉猶ほ覺めませんから、春風の誘ふがまゝにチラ〳〵と散る前栽の櫻花を眺め、燃るが如き牡丹の若芽を、二三日見ぬ間に豪く伸びたと、緣端に立ち出でゝ無量の感慨に堪へず、心なき今日此頃に痴態は何事ぞと、東の空に向つて暗涙に咽んで居ます折から、玄關に誰れやら訪問ふ客の ある樣子、内藏助は態と座敷の眞中に大の字形に仆れて空鼾で居ります。

『お父上、お父上！』

と呼ますは松之丞でございますから、内藏助は細く目を開きまして、

『誰が來ても留守ぢや、留守ぢや。』

と相手に成りません、松之丞は父の氣質を能く呑込んで居りますので、何人が來たとも申しませんで、其の儘そこを退りました、内藏助は俄に跳ね起き庭下駄穿くも遲しと、玄關わきの栞戸の方へ出ますと、

『またもお留守でおぢやるかな。』

と苦笑して立ち去らんとするは、小野寺十内と原惣右衞門でございましたので、内藏助はコツ〳〵コツ〳〵と栞戸を敲いて、此處に居るぞとの合圖をします、十内は事に馴れた機智縱横に走る、内藏助の參謀であるから、微笑を含んで栞戸の側に寄ります ると、

『島ぢや、しまぢや……』

と内藏助は言つゝ奥へ入る、十内は首肯いて惣右衞門を勸め、

『大夫は島原でとの御意ぢや。』

『然らば御身と共に拙者も參るであらう。』

『御案内致すでおぢやる。』

と十内は先に立ち山科から島原へ道を轉じましたが、此の人は永く京の御留守居役も勤めて洒々磊々な性質でございますから、斯かる場所に馴れて中々通人であるけれど、惣右衞門の如きは遊廓などへまゐるのは迷惑に思ふが、之れも是非も無いのでぶらぶら參る途中、バツタリ大高源吾に逢ひましたので、

『是れは大高氏、好い處で御意得申した、幸ひぢや、御同行成さらぬか……』

と惣右衞門が申しますると、十内も口を添へて、

『是れより彼の處で大夫とお逢ひ申すのぢや、貴殿も共に……』

と云へば、源吾は莞爾いたし、

『はゝア、又してもでござるか、拙者も江戸表の消息がござつたのでな、御目通して

と存じた處でおぢやる、御同行を願ふでおぢやらう。』

と三人は然り氣なく島原の揚屋にあがつて、遊興して居りました。

總大將の内藏助が先立ちての揚屋通ひに憂き身を窶し、西に東に所嫌はず豪遊を極めますから、部下にある大高源吾、中村勘助の如き壯年連中も遊里に入浸つて放蕩をする、老人連の小野寺十内でも原惣右衞門の如きも心ならずも濁水に塗れ、白粉くさき香の漂ふ場所に眠ることもありますが、此の人々はまだ老人と云へども老朽たと云ふ年配でありませんけれども、一層の老骨でもあり殊に武邊一片の嚴格な間瀨久太夫の如き老人まで、揚屋の酒に顏を餘焐らせまして、孫に齊しい藝子舞子を相手に苦笑するは、苦々しき限りで白痴と世間から哂はれ、赤穗浪人の自棄のやん八を標榜し、

墮落の狀を示すのが主眼でございました。

一面からは内藏助を始め、京阪に散在する同志が遊里通ひに、老も壯きも自棄遊びするやうに世間の口の煩いは、勿化の幸ひであつて放蕩三昧との噂は同志に取つての、人目を避ける最大の便利でございました、何故かと云へば、彼れ程の壯擧を企てるには準備の容易ならぬ者がある、絶ず當方と江戸との往復打合せが大切である、其の度毎に同志の重立者が其處此處と寄合つては自然と人の目にも附きませう、人の目に附くからは敵の隱密は油斷なく目を皿に見張り、耳を兎のやうに押立てゝ窺ひませう、であるから、此の視聽を避けるには尋常のことでは不可能であります、そこで揚屋にあがつて白痴を盡し、藝子幇間を相手にドンチヤン騷ぎの豪遊を遣つてゐますれば、如何に猜疑心の深い隱密でも、一寸と視聽の屆かない事が多くある、是れが内藏助の第一とする目的で、其『うき樣』で世間の笑はれ者と成つてからは、復讐の計畫に就ての相談は何時も靑樓の奥座敷に、參謀の小野寺十内、大坂近所に散在する同志の總名代原惣右衞門、京都近附の一部の代表者大高源吾等と密議を凝らしたのであります。

廣間では壯年者が飲めや唄への大陽氣に、底拔騷を遣る中で内藏助は醉ふた〳〵と寂かな座敷に醉倒れまする側には、入り代り立ち代り惣右衞門にあらねば十内、十内にあらねば源吾と云ふやうに相會し、夢や現の醉漢どの『うき樣』は又寢なはれたかと、表二階の騷がしき處、何ぞ知らん、復讐の策戰計畫は常に凝議されて居たのでございます。

小野寺十内の案内で、原惣右衞門と大高源吾とは、酒氣漸く頰に現れますころ、内藏助は只だ一人飄然揚屋の門口に立ちまする、

『うき大盡樣ぢや……さア〳〵うき樣お二階へ……十さまも先刻からお待ち成されてお出でるやな。』

四四　紅筆走る里景色

うき様のお出でと一座は、ます〳〵陽氣になる、内藏助は藝子仲居に取卷れて座敷へ來るや、

『是れはお揃ひぢやの、一段と面白さうにおぢやる。』

と席に着きますると、一座から献す盃を受けては飲み、受けては飲みしますうちに、微醺を帶びてまゐるに從つて、舞子は花に戯るゝ胡蝶のごとくに舞ひ、幇間は駄洒落を吐き得意の隱し藝を演ずる、座敷は轉覆るやうな賑かさも一時、ア、最う降參ぢや許せ〳〵と内藏助は醉仆れまする、又かいな、うき様の狸が始まつたと仲居どもは搖り起さうとするので、煩さうに許せ〳〵と起きてひよろめきつゝ、酒席を出ると十内も同じく、

『大夫も、今日は豪い酩酊ぢや、どりや拙者が御介抱申さうかい。』

と同じく起ちあがつて仲居に指圖して、奥の靜かな一室に伴ひ入りますと、仲居は慰れたもので、直ぐ茶を入れて持て來る、十内は

『拙者が附いて居るぢや、一時は靜にお休ませ申せ……』

と追ひ遣りまする。時を計つて惣右衞門も、

『大分參つて、足も腰もたはい無う成り居つた……』

と一室に入つて來ますと、惣右衞門は懷中から一通の書狀を取り出し、

『江戸表から昨日到來いたしたが、此處許の計略圖に當り、敵の用心も何うやら薄らいで、彼の米澤行きも延引いたして居る樣子でおぢやる。』

『忠左よりも左樣な消息がおぢやつたで、今一辛抱……』

と内藏助は言つた切り轉り横になると、鼾聲雷の如く室外に漏れました、兩士は互に

密議を凝して内藏助の耳に口寄せ、暫らくは首肯き合てゐるうち、仲居の來た足音に、此處よ此處よと手を鳴らして枕をさせ小夜被を着せおき、

『我れ等は最う一杯參らう。』

と座敷へ復ることも例でございました。

忠臣藏の狂言に茶屋場の由良之助の狂態、由良さん此方手の鳴る方へと云ひ、また由良鬼何處だなどとたはけた狀を演じまするも、實際この濫行の狀を形に寫したもので、一力の遊びは巧に内藏助の苦肉の計略を能く現したものでございます、其の放埒三昧の白痴さも、揚屋の内ばかりでは、まだ〳〵世間の口の端に掛ることが遲いからとて、身の墮落を世間に知らせるが目的でありますから、只だ揚屋通ひに太夫を引付けて巫山戯、京の升屋で夕霧はこの頃うき樣の揚詰めぢや、伏見の撞木町で笹屋の浮橋にはうき大盡も生血を搾られて居やはるとばかりでは、其の本意でありません。

夕霧と浮橋を兩手に花と狂ふ中に、氣の多いと謗るものゝあるこそ本望、當時京都に隱れなき歌舞伎役者で、遊女を凌ぐ全盛な瀨川竹之丞を愛して、之れをすら何時も膝下に引き寄せおいて、金にあかした贅澤を盡して居りました。

ある時は同志の面々と大陽氣に騷ぎ狂ひ、流連荒亡歸るを忘るるの趣きも演じますれば、又たゞ一人飄然と揚屋の門に駕を下させ、淺酌低唱して通人遊びに耽けり、夕霧に三味線彈かせて小唄をうたひつゝ、興いよ〳〵至れば自ら三味線取つて爪彈に、しんみりとした眞ねこ遊びも遣りまして、それも懶くなれば夕霧の膝を枕に眠ることもあり、また目を覺ませば右に美人を擁し左に伊丹の諸白を置き、後は床の柱に凭れて何事も只だ行樂の外なく、譯もなく墮落の底に沈みて我れすらも忘れ果たやうでありました。

或る日のこと夕霧を相手に、閑靜な座敷に小唄うたひつゝ、

『太夫、何時ものごとく三味弾いて貰ひませうかい。』

『さア、弾きますぞい、うき様唄はしやんせや。』

と夕霧は三味線抱へて調子を合せまするとと、内藏助

『何時も同じもの唄うも面白うない、どれ〳〵待ちやれ。』

と云つて傍にありました蒔繪の硯箱引寄せるや、夕霧は墨すり流しながら

『うき様、何を書かしやんすえ、面白い端唄でも書いて下はれや……』

と嫣然するを、横目に見惚て、

『可し、可し、今そもじの爲めに、書いて進ぜやうぢや。』

と紅筆とつて小菊の紙にさら〳〵と、書いて與へましたは本調子でございます。

『書きをつたぞよ、これ弾いて聞かして貰ひたうおぢるのう。』

『是れはまア、面白う出來ましたなア、妾なんぞに節も調子も合ますまいが、何もう

き様のお慰みでござんせう、どれ……。』

と暫く唄の文句を讀み、夕霧は三味線取つて唄ひ出しましたは、

ふけて郭の裝ひ見れば、宵の燈火うちそむき寢の、夢の花さへ散らす嵐のさそひ來て、合閨をつれ出すつれ人男、餘所のさらばも尙ほ哀れにて、裏も中戸をあくる東雲、送る姿のひとへ帶、とけてほどけて寢亂髪の、黄楊の合黄楊の小櫛もさすが涙のばら〳〵袖に、こぼれて袖に、露のよすがのうきつとめ、合こぼれて袖につらきよすがのうきつとめ。

と唄ひ終りまして、夕霧はまた嫣然と、

『お恥かしい調べでござんしたのう。』

『いや、何うも面白う聞かれたぞや、聞き馴れた唄より又一段に興があるのう。』

と内藏助も笑ひながら、自分も低く唄ひまして夕霧に三味線を弾せました、この唄は

後々までも『里げしき』と云つて、内藏助の自作と傳はり、就中彼の快擧がございまして、我れも〳〵と此の小唄を習ひ覺え、祇園町でも島原でも盛んに唄つたと申します。

ある時はまた如何に詭計とは云へ、大小兩刀さへも投げ捨て、墨染の法衣を着て、遊郭へ浮れこみ、あられも無き其の姿でのほろ醉機嫌、大勢の末社を引き連れ、白晝歌舞伎役者の瀨川竹之丞と手を引きながら、人の群集する祇園清水のあたりを狂ひ歩き、其處よ此處よとお茶屋へ押上つては大酒宴、一しきり騷げば最う飽きた、さアまた外のお茶屋へと梯子酒、醉步蹣跚女どもの肩を杖と狂ひ廻つた果てが、何處でも此處でも會釋なく、往來の繁き大道にころり大の字形、前後も知らぬ鼾の聲のみ高く寢て了ひますので、

『そりや、うき大盡のお寢みぢや、よいとこどつこいさのさ。』

とお供の末社が手取り足取りして扶けて參ることも度々でございました。

此の光景には流石同志の面々も眉を顰めまする程ですから、内藏助の一擧一動に注意する敵の隱密も呆れて了ひました、斯くまでに思ひ切た遣り方に、同志のものでも其の眞情を疑はず居られません、此處が内藏助苦心慘憺たる處で、敵を欺くは先づ味方よりすの兵法を實現したのでございませう。

四五　眞情大義を說く

白痴の有らん限りを盡します内藏助の擧動には、常にその胸底を知る同志の者とて、尙ほ復讐の意志あるやを疑ふ程でございますから、只だその外貌にばかり注意する隱密どもの眼には、放埒三昧に日を送るを心にもなき狂態と觀破する力がないので、内藏助は全く酒と色とに惑溺する凡夫である、迚も復讐などの大志はあるまい、一時世

間から彼れ是れと重きを置かれたは買被りであつた、叩きあげて鞴に掛けし彼れの性質は、金無垢でも無く銀無垢でも無く、矢張世間並に碌々たる天竺浪人よと、曇つた眼鏡に相場を極めまして、吉良家へも上杉家へも洛中洛外に散布しある間諜より頻々と報告が參るので、天晴智慮に富む上杉家の家老千坂兵部も、それでは餘りに考へ過ぎた杞憂であつたかと、少しく安堵をする位でしたから、其の他のものは最早大丈夫と氣を許し、隱密も追々と引揚げさせました。

是こに於いて内藏助の身の周圍は漸く幾分の寛ぎを得ましたが、中々油斷したら如何なる事から大事の漏れやうも知れませんので、その狂態はます〳〵激しく、早や亡主の一周忌と成りました。

内匠頭の遺骸は去年三月十四日の夜、公儀を憚り片岡源五右衞門、磯貝十郎左衞門等近侍僅に數人附添ひ、高輪泉岳寺の菩提所へ埋めましたが、其の後お墓を建てますことも法會を營むことも勝手たるべしと、公儀からの許しもございましたから、墓標も建て六月には百ケ日の法會も執行ひますれば、赤穗にても百ケ日の追福は立派に行はれ、又その八月には内藏助の肝煎で洛北の瑞光院に亡君の墓碑一基は設けられた程でございますから、一周忌の法會は高輪の泉岳寺にては申す迄も無く、江戸にある人々が心を盡して執行しました、赤穗の舊領地では華嶽寺でも、大蓮寺でもまた高雲寺、遠林寺等緣故ある處に追福の法要あり、瑞光院には京大坂にある人々打寄つて、心の限り亡君の尊靈を弔ひ聲を呑み默拜しました。

同志の面々が御一周忌までにはと望みを屬して居た、御舍弟大學長廣樣の閉門もその儘でございます、急進派の同志は落膽限りなく又も色めき、江戸表から急使は頻々と上つてまゐる、原惣右衞門、大高源吾の一派も漸く江戸の同志と往復が激しく成つて來ましたので、冷靜を裝つて相變らず花鳥風月はさて愚か、茶屋酒に現なき内藏助

も、最早お家再興の望みも到底も適ふまじと、稍その心に決したものがありましたから、敵情視察の役目を命じて前原伊助、神崎與五郎の兩人を江戸へ下し、また千馬三郎兵衞も原惣右衞門の命を帶び續いて江戸へ向ひました。

一方には斯く心を用ゐますものゝ、內藏助の濫行は追々に激しく成つて、原惣右衞門さへも此頃は內藏助を快しとせぬ程ですから、末輩に至つては疑心を抱くもあり、殊に愛身派に屬する日和見の筒井流の面々は、大學の閉門は許されない、內藏助の素行は修まらないので、强がつて力瘤を入れるも何とやら賴み少く、二の足踏んでます因循するやうになりました。

この一兩日內藏助は山科の隱宅に閉居して出ず、書齋に籠つて酒氣もなく瞑想に耽るものゝ如くでございましたが、

『松之丞、松之丞！』

と呼びまする、

『はい、召しまするか。』

と入つて來た松之丞は、敷居の外に兩手を突いて控へまする面を、內藏助はヂツと視詰めて、

『用談がある、近う進め！』

と云つて形を正しましたから、松之丞は常になき父の擧動を怪しみながら膝行して、

『御用の趣きは……』

『松之丞、其方も最早十五歲に相成つて物の理解も少しは辨へられるであらうと存ずるが、何うぢや。』

『御意におぢやりまする、未熟ながら自分には理解の參る心得でおぢやるが……』

『左樣無うては成らん筈、然らば今父が申し聞ける言に心を留められよ、凡そ人とし

て執るべき道は義より重いものは無い、其の義と申すは君臣より重いものは無いぢや、其方も能く知つてであらう、父は先殿様の御厚恩を受けた者で、義として一死以て之れ報い奉らねばならぬ、其方はまだ部屋住であつたが、此の歳月暖衣飽食不自由なく成長し、物の黑白を辨へるやうに成つたは、皆先殿様の賜ものであるぞよ、父は死を以て最後の御奉公をする所存でおぢやるが、其方は生を捨てゝ義を取り、父と俱に死する所存は無いか、全體親の口より子に死を勸めるは人情の忍び難いことである、併し生くれば必ず死するが一生の常で、遲いか速いか一度は死するのぢや、不義の生を保つて人に笑はれんより、義の爲に死し芳を千歳に傳ふるは、人生の譽れであらうと存ずるでのう、大義人道の上から其方を深く愛する至情で、父が其方の心を聞いたいのぢや、若しまた其方は父の辭に理解が參らぬならば、强て父と俱に死せよとは申さぬ、其方の母は永の離緣を與へて吉千代以下の者と豐岡へ使はさうと存ずるで、其方も母と共に此處を去れば宜いのぢや、最早十五歳にもなれば思慮を定めて答へるが宜からうぞ。』

と言ひ了るや、松之丞はハラ〳〵と落る涙を拂ひまして、左も恨めし氣に父の面を見仰ぎて、膝を摺り寄せ、

『父上にはお情餘つてお恨めしう存じまする、不肖ながら日頃の御教訓は忘却は仕りませぬ、大義名分は辨へ居りまする所存、父上に背き、君恩を棄て、不義の名に忍び家名を汚し、父上の面に泥を塗り申さうや、願はくば御供いたし父子國に殉し度存じまする。』

と言葉凉しく凜然と言放ちました。內藏助は滿足らしい調子で、

『おゝ可し、可し、臆れを取つては成らぬぞよ。』

と戒しめ、松之丞が幼時內匠頭に愛されました事まで、夫れとなく言聽して我が兒の